銀の龍と愉快な仲間たち

えふちー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀の龍と愉快な仲間たち

【Ｎコード】
Ｎ６７４５Ｉ

【作者名】
えふちー

【あらすじ】
幻想郷に住まう龍と愉快な仲間たちのほのぼの物語。

オリジナル主人公、オリジナルキャラ、作者の私的見解等を含みます。
苦手な方や「オリジナル主人公？私的見解？ハッ！頭腐ってんじゃねぇの！？」な方は読まない方が良いかと思われます。この作品はそういった要素をかなり多く含んでおります。

※半端な形で完結しています。理由につきましては、６／２３の活動報告をご覧下さい。

―Tale the silverdragon―

銀龍と愉快な仲間たち

第1話
銀龍と小刀とちび剣士

季節は秋
幻想郷の秋晴れの空に
やけに長い銀色のボサボサ髪をなびかせて
ゆったり飛んでいる影が一つあります。
「暇だなぁ…神社でも行ってみるか」

彼の名m「ふわーぁ」
……彼の名前はフラガ
鈍い光を放つ黒い翼を持った、人の形をした銀の龍です。

幻想郷の秋晴れの空に
銀龍の欠伸が吸い込まれていきました。

所変わって博麗神社

「ふわぁ…今日も暇ねぇ」
ここにも欠伸が一つ。
今日も巫女が掃除のフリをしています。

「最近落ち葉がすごいわねぇ…紅葉は良いけど落ちないでほしいわ」
理不尽な事を言う巫女の名前は博麗霊夢。
幻想郷に数多くいる暇人の一人です。

「お茶でも飲もうかしらね…」
「なら私の分もいれてくれるとありがたいぜ」
「いつの間に来たのよアンタ…」
「いつの間にかだぜ」
もっともです。
この魔女っ子は霧雨魔理沙。
幻想郷に数多くいる暇人の一人です。

「はいお茶よ」
「サンキューだぜ」
この二人はいつも神社でだらだらしています。暇人です。
…と、何やら空に小さな影が見えます。
「あれってアイツじゃないか？」
「多分アイツね」
徐々に影が近づいてきます。
二人の言うアイツの正体とは…！

「おはよう霊夢、と…魔理沙も来てたのか。早いな」
「おはようフラガ、魔理沙も来てるわよ」
「おはようフラガ、お前も十分早いぜ」

そう、ふよふよと空を飛んでいたフラガでした。

「で、アンタは何しに来たのよ？」
お茶を啜りながら霊夢が言います。
「なに…久しぶりに賽銭でも入れようかと思ってな」
そう言うとフラガは賽銭箱に５００円玉を投げ入れました。
「大変だフラガ！霊夢が固まったぜ！」
「大袈裟だな霊夢…」

ここでフラガの紹介をしておきましょう。
彼は人間の里近くに屋敷を構える銀龍です。
幻想郷では龍が神聖視されていますが、彼は一応その龍の長です。
ええ、結構偉いはずなんです。
はずなんですが…

バシィ―ン！！
いきなりフラガの頭を思いきりひっぱたく霊夢。
「フラガ、私のお饅頭食べたわね！？」
「いたっ！ちょ、霊夢、手が先に出てる、手が！」
叩かれて痛がるフラガ。
「わはは！実は饅頭を食べたのは私だぜ霊夢！！」
フラガを盾にした魔理沙。

ご覧の通り、フラガはあまり崇め奉られるような事は好かないので、皆と一緒にお馬鹿な事をやっていたりします。皆も手加減ありません。

この物語は、この皆と一緒に暮らすお馬鹿な銀龍と幻想郷の仲間た

ちが繰り広げる、笑いあり涙？ありの、ほのぼの物語です。

「饅頭食ったの俺じゃないもん」おや、まだ引きずっているようですね。
「わ、悪かったわよ…私も思いきり叩きすぎたわ」
ちょっと本気で謝ってる霊夢…そこへ
「やっぱり霊夢は口より先に手が出るな！暴力的なみk」ベシッ！
ちょっと強めに魔理沙の頭を叩く霊夢。
「元はと言えばアンタが悪いのよ、アンタが」
「いたた…やっぱり手が先なんだな…」
叩かれても仕方ありませんよ、魔理沙。

「そうだ、思い出したぞ霊夢」
「なによ？」
「俺は暇だからここに来たんだが…もう一つ用件があったんだった」
と…なにやら翼に手を入れてもぞもぞし始めるフラガ。
「はい、これ。頼まれてた小刀」
それは、ぴかぴかの小刀でした。
「わ…こんなにぴかぴかに…って言うか…毎度思うんだけど、よくその翼に手を突っ込んで切れないわね」
霊夢の疑問はごもっとも、フラガの翼は、何枚もの鋭い刃で出来た黒い翼なのです。重そうです。
「それより…どうだ？使い心地は。新品の時と変わらないか？」

「新品の時以上ね…流石フラガ。武器を扱わせたらピカイチね」
「なあなあフラガ、私のホウキも…」
「どこも悪くないだろう？」
「むぅ…」
あ、魔理沙が拗ねてます。やっぱりまだ子供ですね。

「ああ霊夢、その小刀にちょっと仕掛けをしといたぞ」
「仕掛け？…またいたずらじゃないでしょうね？」
「まさか。いずれお前にとってプラスになる仕掛けさ」
「ふぅん…まあ期待しないでおくわ」
「なぁなぁフラガ、私のホウキにも仕掛けを…」
「空中で割れる仕掛けかい？」
「むぐぐぐ」
あ、顔を真っ赤にして拗ねてます。
「まあ…そう拗ねるな魔理沙。後でなんか買ってやるから」
「こんぺいとうがいいんだぜ！」
やっぱり子供ですね。

そんなこんなで時刻は丁度正午。
「じゃあ、そろそろ行くよ。またな霊夢、魔理沙。」
「もう行くの？」
「どこに行くんだ？」
「一旦武器を取りに屋敷まで戻って…それからちょっと白玉楼まで」

ここは白玉楼。
大食い幽霊と半分死んでる剣士が住んでいます。

おや？あれは…

ドタドタドタ…

「ゆ、幽々子様、それっ…夕御飯のおかずですっ…！」

ふよふよふよ…

「やぁね、よーむったら…結局食べるんだから変わらないじゃない♪」

ドタドタ…は半分死んでるちび剣士の魂魄妖夢。ふよふよ…は死んでる白玉楼の主、西行寺幽々子。

どうやら幽々子は夕御飯のおかずを持って逃げ回っているようです。

と、そこへ降り立つ影が一つ。

「お、またやってるのか、妖夢」

フラガです。背中には長い刀を背負って…

「あはは！懲りねぇなぁゆっこも！」

「うるさい、フランバージュ」前者のうるさいのはフラガの背中に背負われた抜き身の超長刀、フランバージュ。後者の落ち着いた方はフラガの腰に下げてある銃、聖十字。

なんと、二つ…いや、二人とも生きた武器なのです。ビックリです。

「あ、フラガ様、こんにちは！」

「おはようフラガ～♪」

二人が追いかけっこを止めてフラガに近寄っていきます。

「あの…フラガ様、フランバージュさんを背負っていると言うことは…その…」

「ん？ああ、久しぶりに手合わせでも、と思ってな」

「あらぁ、またチャンバラ？いいよいいよー♪やっちゃえフラガー！」

「ちょっ…幽々子様、私を応援してくださらないんですか？」

妖夢はちょっと涙目です。

「だってよーむは夕御飯のおかずくれなかったしぃー」
「まだお昼ですよぉ！」
ツッコミむなしく、ふにゃふにゃと笑う幽々子。
「あはは…で、どうする妖夢？手合わせするかい？」
「あ、はい！それはもちろん、喜んで！お願いしますっ！」
ブン、と勢いよくお辞儀をする妖夢。あわわ、頭がもげる。

「さて、準備はいいか？妖夢」
「はい！いつでも大丈夫です！」
「手加減しねぇぞ、ちび剣士！！」
「私は使わない？フラガ…」
聖十字が聞いてきます。
「ああ、悪いな。今日は純粋な剣術で戦うんだ。また今度な。」
「しょんぼり…」
「ざまぁみろ聖十字！！あはははは！」
「うるさい、フランバージュ」
この子、フラガに対する態度とフランバージュに対する態度が違いすぎます。

「では、行きます！」
両者が構えた直後に、妖夢の猛烈な突進。
「ふっ！」
「おっと」
ギンッ！
突進しながら降り下ろされた刀を、フランバージュで受け止めるフラガ。二人の刀が火花を散らします。
「一念無量劫っ！！」
ビュオッ！
妖夢の刀から放たれ、勢い良くフラガに迫る斬撃。いきなり大技で

す。フラガは大丈夫でしょうか…
「うーむ…悪くはないが動き出しが遅いな」
「！！」
いつの間にかフラガは妖夢の後ろに回っていました。
「くっ…！」
バッ、と飛び退く妖夢。
「飛び方が甘いなぁ」
フラガはすぅ、とゆっくり刀を構えます。
「最近動いてねぇな？ちび剣士よぉ」
「ふっ！」
ヒュン！
妖夢がさっきまでとは比べ物にならない鋭さで刀を降り下ろします。
「言ったろう、動き出しが遅い」
パシッ、ドンッ
降り下ろされた腕を受け止め、もう片方の手で妖夢を押すフラガ。
「あ、あれ？」
バタ、と呆気なくその場に尻餅をつく妖夢。
そして…
「はい、俺の勝ち」
妖夢の目の前には、ひたり、と妖夢の首筋に刃を当てる笑顔のフラガの姿。
「あ…ぅ…」
妖夢はもう動けません。恐怖とか、あと、見とれてたりとか。
「まったく…ちょっと怠けてるな、妖夢」
「ホントホント！手応えがないぜちび剣士！」
「うるさい、フランバージュ」「う…す、すみません…」
悔しそうにうつむく妖夢。
「ああいや、責めてる訳じゃあない。まだまだ成長の余地はある」
「ホントですか？」
「ホントだとも」

そして、この二人の剣士を遠くから眠そうに見つめる幽霊がぽつりと、
「でもよーむは半分幽霊だから、成長も半分よね？」
今の妖夢には痛い一言。
「ぅぐ…」
涙目になる妖夢。ちょっと可愛いです。
「ゆっこ…お前ちょっと空気を読んでくれ…」
「流石だなゆっこ…」
「幽々子さん…」
心配そうな三人。

この後、フラガと妖夢はしばらく夢中で剣の練習をしていたため、なかなか夕御飯にありつけず自分の発言をちょっと反省する幽々子でありました。

―Tale the silverdragon―（後書き）

初めまして、えふちーと申します。
私のデビュー作、いかがでしたでしょうか。
まだまだ改良の余地がある…と思いますので、気に入って頂けたら幸いです。
では、銀の龍と愉快な仲間たち　第二話で会いましょう。

第2話
こうまかんと銀の龍

大きな湖畔のそばに
場違いな洋館が一軒佇んでいます。
ここは紅魔館。
吸血鬼が住んでいるお屋敷です。
大きな門の前には、とても強い門番の妖怪がいるのですが…

「ぐぅ…うへへ、咲夜さぁん…ぐぅ…そこはらめれふぅ…うへへ…ぐぅ…」
…なんだかとても気持ちわ…気持ち良さそうに寝ています。
彼女は紅美鈴。お昼寝妖怪…もとい紅魔館の門番です。
そこへ…

「美鈴!!起きろ!!めいりぃぃん!!!!」
なんだかうるさい銀龍が来ました。
「ふにゃ!?す、すみません咲夜さん寝てません!!…あれ?」
間抜けに飛び起きる美鈴。
「咲夜じゃない、俺だ、フラガだ」
「ああ、すみませんフラガさん!私…寝てました…よね」
自覚が無いのか、分かっていて言ってるのか。美鈴はまだ寝ぼけ眼です。
「うん、寝てた。ところで夢の中で咲夜に何をさr「きゃあああああ!!言わないで下さい言わないで下さいー!!恥ずかしいぃぃー!!」
木々を揺るがす大声。やっぱり自覚はあるみたいですね。フラガは

耳を塞いでいます。
「ううるさい美鈴！耳が砕ける！」
「あ！す、すみませんフラガさん！」
声って武器になるんですね。

「ところでフラガさん、今日は一体どんなご用件で？」
「ああ…うん、パチュリーに本を返しに来た」
「なるほど…だからフランバージュさんと聖十字さんは連れてきてないんですね…本は…魔理沙の分もですか」この二人、全部話さなくても通じるみたいですね。

大図書館。
紅魔館にある、とても大きな図書館。パチュリー・ノーレッジの住みかです。

ギギ…
「パーチュリーぃ」
大きな扉を開けて、フラガが入って来ました。
「あら、珍しい客ね」
「こんにちは、フラガさん」
出迎えたのは、パチュリー・ノーレッジと小悪魔。
「ほら、これ。俺が借りてた魔導書と魔理沙が盗んだ本」
ぼふ、と分厚い魔導書を置いて、ドサッ、と大きく膨らんだ布袋に入った本を置きました。すごい重そうです。
「ありがとう。こぁ、この本を全部元に戻してちょうだい」
「分かりましたパチュリーさま」
言われて小悪魔はテキパキと本を…
「きゃあっ！？」ドサドサッ
…つまづいて転んだみたいです。ドジっ子ですね。

「何をしてるのかしらあの子は…」
「大丈夫かこぁー」
「だ、大丈夫ですぅー」
困った司書ですね。

「咲夜」
「はい、お嬢様」
こちらは紅魔館の主レミリア・スカーレットとその従者十六夜咲夜。
「フラガが来ているようね」
「そのようですわ。会いに行かれますか？」
「…いや、その必要はない」
コンコン
部屋に響くノックの音。
「入りなさい」
ガチャ
「ようレミリア、遊びに来てみましたー。最近はお前がうちの屋敷に来るからなぁ」
そう声をかけると、まるでこれは自分の座席だと言わんばかりに、どかっとソファに座りました。
「なに、今日は天気が良すぎるからね…出歩く気にはならんのさ」
「吸血鬼かお前は」
「吸血鬼だよ私は」
「ふふっ」
微笑ましいやり取りに、思わず咲夜は笑います。
「そうだ咲夜」
「？なんでしょうフラガさん」
フラガは翼に手を入れてもぞもぞし始めました。なんだか見覚えのあるくだりです。

「はい、頼まれてた投げナイフ。と、銀龍印の投げナイフ。」そう言ってガシャガシャ、と音をたててたくさんのナイフを翼から出し、テーブルに広げました。
「何本作ったか忘れたけど、多分５０本はあるかな」「毎度思うけれど、その翼のどこにこんなに入ってるのよ」
「ってフラガさん、銀龍印の投げナイフって何かと思えば…フラガさんの羽根じゃないですか…」
確かに銀龍印の投げナイフとやらは、フラガの羽根のようです。
「いや、よく飛ぶよ？切れ味良いし」
「そういう問題ではなくて…その、大丈夫なんですか？こんなに抜いて…」
「大丈夫、そろそろ生え変わりの時期だから」
「ええ！？その翼生え変わるんですか！？」
「何だ、知らなかったのかい咲夜。フラガの翼は年二回生え変わるのよ」
「抜け落ちると危ないんだよなぁ」
ごもっとも。
「じゃ、じゃあ、髪の毛とかも生え変わったり…」
「「それはない」」

フラガが部屋を出ると、不思議な形の翼を持った小さな女の子がいました。
「あ！フラガーぁ！」
ズドン！！
前方からの急な砲撃に対応出来ないフラガ。
「ぐはぁ！」
フラガの腹部に強烈な頭突きをお見舞いしたのは、フランドール・スカーレット。レミリアの妹です。
「ねぇねぇ！遊ぼうフラガ！遊ぼーう！」
「ぐふぅ…フラン…痛いから…腹に穴が空くから…」こいつ、まさ

か俺を暗殺しようとしてるのではあるまいな、と思うフラガでした。

「行くよフラガぁー！」
ドシュッ
目にも止まらぬ速さで何かを投げるフラン。
バシィッ
それを難なく受け止めるフラガ。
「おー、速くなったなぁフラン」
「えへへぇー♪」
「ほいっと」ヒュッ
手首の動きだけで、とんでもない速度で何かを投げ返すフラガ。
シュドッ
腕では抑えきれず、お腹を使って止めるフラン。
「むー…やっぱりまだフラガの方が速いねー」
「あっはっは、まだまだ子供には負けないよ」
「あー！フラン子供じゃないもん！」
ヒュゴッ
先ほどの倍以上の速度で投げ返すフラン。
ドシィッ
またも片手で受け止めるフラガ。
「おっ、また速くなったぞ」
二人がしているのは撃ち合いではありません。ただのキャッチボールです。効果音があり得ません。痛そうです。

「ほらほらフラガー！避けて避けてー！」
ガガガガガガ！！
カラフルな弾を打ち出すフラン。
「ふむ…美しいが密度がまだまだだな」ひょいひょい…パシッ！
軽い挙動で弾幕を避けたり弾いたりするフラガ。
ああ、いつの間にか弾幕ごっこになっています。あんまり荒らすと

メイド長に怒られますよ。

「……ですし、大体フラガさんもいい大人なんですから少しは……」
おやおや、やっぱり怒られてます。
「いや、だって咲夜…俺は」
「だってもヘチマもありません！」
「ぅぐ」
この龍は基本的にいたずらっ子です。怒られるのは慣れていますが、どうも咲夜に怒られるのは未だに怖いようです。
「フラン様も、いい加減屋敷を荒らすのは…」
「分かってるよー咲夜ー」この点フランは慣れたものです。いや、慣れるのも困りますが…

ちなみにフラガ達が暴れたのは屋敷のロビー。広いけれど暴れればそりゃあ色々と壊れます。

「いやぁ、また派手にやってくれたわね」
「あ、お嬢様…お嬢様からもなにか言ってください！」
「ん？ああ…まあ良いんじゃないかい？フランはまだ子供だしねぇ」
「フラン様はともかく、フラガさんはもうたいそうな歳ですし…」
「たいそうな歳とか言うな」
ちなみにフランは４９７歳、フラガはなんと３３５０歳です。驚きです。フランも十分子供ではないと思います。

しばらく経って。
「いい時間だな…じゃあ俺はそろそろ…」
「ん、また来なさい、フラガ」「えー、もう行っちゃうのー？」
「ああ、ちょっと用事があるしな」
時刻は午後４時。日はだんだんと沈み始め、夕陽がきれいな時間帯

です。
「用事、ですか？」
「うん。永遠亭に薬を貰いにな」
そう言うと、フラガは窓から飛んでいきました。

いかがでしたでしょうか。銀の龍と愉快な仲間たち第２話。
今回は紅魔館でのほのぼの物語になっていると思います。
えー、お気付きの方も多い事かと思いますが、この小説は絵本風の語り口、ですます調で書いております。普段の場面も、これから予想されるちょっぴり悲しいお話も、のんびり、ほのぼのした雰囲気が出れば、と思いました。
そしてなんと！この作品をお気に入り登録して下さった方が数名いらっしゃいました。誠にありがとうございます。
この作品を楽しんで読んでくださる方がいる限り、私はこの作品を書き続けたいと思っております。
では、第３話でお会いしましょう。

―Silverdragon in bamboowoods―

第3話
永遠亭と銀の龍

ここは迷いの竹林。
辺り一面に背の高い竹が生い茂る、空気のおいしい林です。
でも、迂闊にここに入ってはいけません。なぜなら…

「うわぁ…また迷ったなこりゃあ…困ったな…普通に空を飛んでいけば良かったかな…」
このちょっとお馬鹿な銀龍のように、すぐに迷子になってしまいますから。
「あぁーあ、その辺に妖怪兎でも落ちてないかなぁ」
なんて呟いていると、なにやら怪しげな影が前から近付いて来ます。
「ふんふんふーん…鈴蘭アブラナトリカブトー♪ふんふんふーん…」
なんだか一部危険な歌を歌う影は、鈴仙・優曇華院・イナバ。背中にはたくさん草が入った大きな籠を背負っています。
「…なぁうどんげ、お前の師匠はなんの薬を作ろうとしてるんだ？」
「うわぁビックリした！急に声をかけないで下さいよフラガさーん」
「俺はお前の歌ってた歌にビックリなんだが…まあいいや、とりあえず永遠亭まで案内してくれないかな」
「良いですよー♪また迷ったんですねフラガさん…うふふ♪」
「うるさいぞうどんげ、耳を引っこ抜くぞ、耳を」
「いたたたた！痛いです痛いですフラガさん！ごめんなさーい！」
涙目になりながらジタバタするうどんげ。今日も幻想郷は平和です。

時刻は午後5時。

そしてここは永遠亭。
ガラガラ
「ただいま帰りました師匠ー」
「おかえりうどんげ…って、なんだかずいぶん珍しいものを採ってきたわね」
「ひどいなえーりん…珍しいものとか言うな」
うどんげとフラガを迎えたのは、永遠亭の薬師八意永琳。よく効く薬からちょっと危ない薬まで幅広く作っています。
「ところでうどんげ、てゐは何処へ行ったの？」
「さあ…薬草を探している内にいつの間にk「がおーっ！！！」「きゃあああああ！！！」
いきなりうどんげの背負っていた籠から飛び出したのは因幡てゐ。
うどんげはビックリしてその場に倒れ込みました。
「あはははは！臆病だねぇレーセン、と久しぶりフラガ」
「おぉ、久しぶりてゐ。あと、それは誰でも驚くぞ。」
「あわわわわわわ…」
ガタガタ震えるうどんげ。
「あらあら…うふふ」
あ、うどんげのぱんつが丸見えです。永琳は何故か満足気です。

「ところでえーりん、ちょっと薬をくれないかな」
「良いけれど…どんな薬かしら？」
「目の疲れに効く薬をな」
「ああ…また？あまりやりすぎないようにね
「そうは言っても仕方ないさ。けーねはパソコンが使えないからな」
「あら、けーねちゃんはまだパソコン使えないのね」
「アイツはもう無理だろうな、パソコンは」
二人は何の話をしているのかって？それはいずれ分かりますよ。

「さて、用も済んだし…帰ろうかな」

「ちょっと待ちなさい、フラガ」
奥から出てきたのは、永遠亭の主蓬莱山輝夜。
「なにか用かな？輝夜」
「ふふ…今日こそふぁみこんで貴方に勝ってやるわ！」
「えー、またファミコンかよ…うちに来ればもっと色々…」
「うるさい！私はふぁみこんが良いのよ！」
つまり輝夜は他のゲームだと操作が難しくて出来ないのです。ちなみに…なんでゲームやらパソコンがあるのかは、また別の機会に…

「あっ、貴方今ズルしたわね！？もう一回よ！」「うへぇ…お前よく飽きないな…」
「姫様、ご飯の用意が出来ましたよー！フラガさんも食べて行きますかー？」
「ああ、じゃあありがたく…」
「フラガ！目の前の戦いに集中しなさい！」
「飯食べてからにしような？輝夜。」
ニコッ、となんだか恐ろしい笑顔。
「ぁい」
これには輝夜もたまらず降参したようです。

時刻は午後7時。
永遠亭には美味しそうな晩御飯の香りが漂っています。
「あ！ネサラディアに連絡すんの忘れてた」
ネサラディアとはフラガの妻です。今は屋敷にいるようですね。
「まあ…貴方がふらふらしてるのはいつもの事だし、平気じゃないかしら」
と、永琳。
「む、また人を風来坊みたいに言うな」

（違ったんだ…）
（違ったのね…）
（風来坊だろ…）
「お、この粥は美味いな、何のお粥だ？」
「薬草粥ですよ」
「え！？薬草粥でこんなに美味いのか！？」
「フラガさん、目が疲れてるって言ってましたから…」
「いやぁ…流石薬師の弟子だなうどんげ」
わしゃわしゃとうどんげの頭を撫でるフラガ。
でも薬師の弟子はあまり関係無いと思います。
「えへへ…」
「むっ！フラガ、私の頭も撫でなさい！」
ガターン！と立ち上がるのは輝夜。さっきまでの勝負モードは何処へやら。
「あらあら姫様、いけませんわ、そんなに騒いでは…」
と言いつつ輝夜を座らせる永琳ですが…
「！ちょっ…永琳！どこ触ってるの！コラ！もう座ったから！永琳！」
永琳は輝夜の胸をわしづかみにしていました。
幻想郷は今日も平和…です。

「さて、美味い飯をごちそうになったことだし、何かお礼でもしますか」
「あぁ、いいんですよフラガさん…撫でてもらったし…」
「フラガ！私の頭を撫でなさい！」
「はいはい落ち着いて下さい姫様」
「ちょっ…アンタが一番危ないわよ！」
「まあまあ…ここは電気も通ってるし…」
と言って、フラガはまたも翼に手を入れてもぞもぞし始めました。

「はい、薄型テレビ」
「！？」
「いやいや、流石にその翼から出るわけない…」
ゴトン
「「「……」」」
「ここのテレビって小さい箱形だろ？だから持ってきてみましたー」
「いや、素直にすごいわ、貴方」
「…どこからこんなテレビが…」

「さてと。そろそろ帰りますか」
「帰るって…銀龍邸にですか？」
「そこ以外どこに帰るんだよ…」
「あの…だったら私も連れて行って下さいフラガさん」
「？まあ良いけど…」

時刻は午後９時。
こうして、フラガとうどんげはフラガの屋敷に向かって歩き始めました。

―Silverdragon in bamboowoods―（後書き）

どうも、えふちーです。
いかがでしたでしょうか、銀の龍と愉快な仲間たち第３話。
今回はかなりのほほんなお話になっていると思います。
第２話からほとんど間を空けずに書いたこの第３話、きちんとまとまっているか正直不安です（汗）
今回やっと若干の百合っぽさが出ました。好きな方や嫌いな方、双方が見ても違和感が無い程度ですがね。
えー、次話となる第４話でついにフラガの屋敷が登場いたします。
ポロリもあるよ！（嘘です）
では、第４話でお会いしましょう。

第４話
銀龍邸

時刻は午後１０時。
そろそろ妖怪が騒ぎ出す時間帯です。
「いやぁ、結構遅くなっちまったなぁ…お前は今日止まっていくのかうどんげ？」
「はい。お邪魔させて頂きますフラガさん」
「構わん構わん。うちは無駄に広いからなぁ」

銀龍邸。
人間の里近くに建てられている、大きな和風のお屋敷。
大きさは紅魔館と同じ位ですが、何より周りの風景にベストマッチです。
昼夜問わず、幻想郷の暇人達が集まる場所でもあります。

「ただいまー」
「おかえりなさいませ、主」
この和風な背景に似合わない執事な彼は、黒狼。咲夜と対をなす完璧執事です。
「ただいま黒、うどんげが泊まるから客間を準備しといてな」
「かしこまりました…おや、主」
「んぁ？」
「お召し物に落ち葉が付いております」
と言ってフラガの肩に着いた落ち葉を取る黒狼。やけに顔が近いです。
「…おい」

「なんでしょう主」
まだ近いです。
「近い」
ビシィッ！！
フラガの神速デコピンがヒット。痛そうです。
「これは失礼致しました…主のお顔があまりにきｒ「それ以上は言わなくて良い」
「あわわわわわ」
この執事、ちょっと危ないです。うどんげが困ってます。

フラガとうどんげが居間への廊下を歩いていると…
「む、遅かったなフラガ…夕飯は先に食べてしまったぞ。それと…久しいな、鈴仙」
このヒンニュウな方はヴァルキリー。剣士としてフラガを目指す者の一人です。まな板です。
「ただいまヴァルにゃん。飯は永遠亭で食ってきたから大丈夫」
「こ、こんばんはヴァルキリーさん！」
「なんだそのよそよそしい態度は…ヴァルにゃんで良いと言っておろうが、こいつめこいつめ」
うどんげを抱き締めて頭を振り回す…もとい撫で回すヴァルキリー。
「あうううー…」
うどんげはちょっとヴァルキリーが苦手なようですね。

フラフラのうどんげとフラガは、襖を開けて居間に入りました。
「あら、遅かったわねフラガ。こんばんは、うどんげ」
言いつつうどんげに近寄る彼女はネサラディア。フラガの妻です。
きょにゅうです。
「お前はまた…なんでシャツ一枚なんだ」
「だって服着るの面倒だもの…」
ぽふっ

「んむっ！？んー！んー！」
ネサラディアの胸に埋まるうどんげ。顔が赤いのは恥ずかしいからか、苦しいからなのか分かりません。「あら、可愛いからつい抱き締めていたわ、ごめんなさいね」
わざとらしい棒読みのネサラディア。
「はふぅ…やわらかいれす…」
洗脳されたうどんげ。大変だ、うどんげはおっぱい星人になってしまったぞ。
「今日この子泊まって行くの？」
「うん。泊まってくみたい」
「ふぅん…うどんげ、お風呂に入ったら私の部屋に来なさい。黒ー。客間は用意しなくていいわよー」
「かしこまりました」
「へ…？」
これは大変だ、うどんげは本格的に改造されてしまうぞ！
「あっはっは、程々になぁー」
「ふ、フラガさん！？」
頼みの綱のフラガも、きょにゅうの前に倒れてしまった！うどんげの明日はどっちだ！

後日、偶然銀龍邸の上を通過した天狗のSさんの証言によると、
「いやぁーいい写真が撮れました！これでしばらくはネタに困りませんよ！遊びに来たら偶然Uさんの声が聞こえましてね、声がする方向に行ってみたらこんな写真が撮れたんです！」

夜が明けて、時刻は午前7時。
「んが…あ？朝か…ふわあああぁ」

屋敷の主、フラガが起床しました。
「おはようございます、主」
「んぁ、おはよー黒…とりあえず髪」
「かしこまりました」
フラガの一日は、毎朝ボサボサになる髪を黒狼に解かしてもらって始まります。それでもボサボサですが。
「相変わらずすごい寝癖ですね、主」
「んー」
ついでに言うと、フラガは朝に弱いです。ものすごく近い黒狼の顔にも気付きません。
「はい、終わりましたよ」
「ぁんがとー」
そう言ってフラガは部屋を出ていきます。でも、何か違和感が…

居間。
「おはよー」
とはフラガ。
「おはようフラ…ガ…」
とはネサラディア。
「うむ、おはようフラガ…ん？なんだそれは」
とはヴァルキリー。
「おはようございますフラガさんうわぁぁぁん」
とはうどんげ。
「フラガ…似合ってる…」
とは聖十字。
「うわはははは！！なんだそりゃぁ！！あはははは！！！」
とはフランバージュ。
「ん…？なんだよ皆して…」
まだ寝ぼけてるフラガ。
「フラガ…とりあえず鏡見てきなさい」

「？あぃ」
なんと、フラガはポニーテールにされていたのです。さらに、ボサボサなものですから、ポニーテールがほうきのように広がっているのです。結構面白いです。

数秒後、屋敷中にフラガの怒号が響き渡りました。
幻想郷は今日も平和です。

―Silverdragon　residence―（後書き）

どうも、えふちーです。
いやぁー…、ちょっと暴走気味の第４話、いかがでしたでしょうか。
３話までとは桁違いの異質っぷりですが、書いてて結構楽しかったのは秘密です。
さて、今回はあまり東方キャラが活躍しませんでしたが…第５話では大活躍する…予定です。
あと、作品向上のために、今回みたいなノリが良いと思った方は感想に一言お願い致します。前くらいがちょうどいいって方も出来たら是非感想に一言お願い致します。
では、第５話でお会いしましょう。

―MIKO and silverdragon―

第5話
二人の巫女と銀の龍

妖怪の山。
夏には小川の流れに涼しさを求めて妖怪が集まり、秋には紅葉の美しさを求めて妖怪が集まる幻想郷の名所です。
しかし、そんな名所でも人間は近寄ろうとしません。危ないですからね。
そんな妖怪の山にぽつりと佇む、一軒の神社。守矢神社です。

「おーい、早苗ー。ちょっとこっちに来てくれー」
「はぁい、神奈子様ー」
敷地内の小さな池を見つめて思案顔の女の人は八坂神奈子。
呼ばれて、神社の裏から小走りで駆けてくるのは東風谷早苗。
「なんでしょう神奈子様？」
「いや…何って程でもないんだけどね」
「？」
「この池に沈んでるの、諏訪子じゃないかい？」
「やだなー神奈子様、こんな奇妙な石が諏訪子様なわけないじゃ…」
ザバァ
「いやぁー流石神奈子だね。まさか見付かるとは思わなかったよ」
「きゃああ！！す、諏訪子様そんなところに！？」
一見石に見えたそれは、この神社の神様である洩矢諏訪子でした。
ケロケロ。
「かくれんぼは私の負けかぁ…」

時刻は午前１０時。もうみんな起きている時間帯です。
「そうだ早苗、お前今日何か用事があるんじゃなかったのか？」
と神奈子。
「用事と言うほどではありませんが…博麗神社まで行って来ます」
「ほぉ、一人で行くのかい？」
「いえ、今日は…」
言いかけて、空から降りてくる影に気付きました。
「早苗ー。迎えに来たぞー」
バッサバッサと低空で留まっているのはフラガ。どうやら早苗はフラガに乗って博麗神社に行くようです。
「あ、フラガさんこんにちはー！」
「久しぶりフラガ、酒でも飲んでくかい？」
「バカだね神奈子、フラガは今から早苗を乗せて博麗神社に行くんだ」
「え？そうなの？」
不思議そうに聞いてくる神奈子。
「はい♪今日はフラガさんの背中に乗って行きます」
「ほいじゃあ早く乗れ、早苗。ちなみに重すぎると墜落します」
「あはは、多分大丈夫ですよー♪」
幻想郷の空に、龍に乗った巫女が舞い上がりました。

所変わって博麗神社。
今日もまた、霊夢が掃除のフリをしています。
「はぁ…暇ねぇ」
空を見上げると、そこには雲一つ無い秋晴れ。
「ここまで綺麗に晴れだと逆に腹立たしいわね…」
天の邪鬼なことを言う霊夢。
「…ん？」
霊夢は爽やかな秋晴れの空に、小さな黒い点を見付けました。「…あれ何かしら」

その小さな黒い点は、妙な動きを混ぜながら徐々に大きくなって行きます。こちらに飛んでくるようです。
「敵？いや…あれは…」

一方その黒い点。
「きゃあぁぁぁー！！フラガさん、速い、速いですぅー！！」
嬉しいんだか怖いんだか分からない悲鳴を上げる早苗。
「あははは、これくらいまだまだ。それ、一回転だ！」
と言うと、大きな円を描いて回るフラガ。
「お、落ちる！落ちちゃいますフラガさーん！」
「それ加速じゃ」
キィィン、と物凄い速さに加速するフラガ。
「きゃあああああ！！重力が！重力が苦しいですぅー！！」
幻想郷の空に、龍に乗った巫女の悲鳴が響き渡りました。

「あれ…フラガ…と、背中に乗ってるのは…早苗？」
霊夢は正体に気付いたようで、手に持ったお札をしまいます。
「……！！……！！」
「？なんか言ってるわね…」
まだ遠くてよく聞こえません。
「って速っ！危ないんじゃないの…あれ…」
フラガ達が霊夢めがけて急降下してきます。
「……ぁぁああ！！！！」
「ほいっと」
ブワァ、と翼に風を受けて急停止するフラガ。
ごちん！
「はうっ！」
「いたぁ！！」
その反動で、背中にしがみついた早苗の頭がフラガの後頭部にヒット。これは痛いぞ、大丈夫かフラガ。

「いたた…こんにちは、霊夢」
「おぉぉぉ…」
痛がるフラガ。どうやら大丈夫ではないようです。
「はいこんにちは、大丈夫？フラガ」
「ど、どうってことないさ？」
「語尾疑問形になってるわよ」
「はっはっは、大丈夫さ大丈夫さ？」
「早苗、あんた凄いわね」
「あわわ！すみませんフラガさん！」
「で、どうしたのよ二人して」
「いやぁ…久しぶりに霊夢の顔を見たくなって」
「好きなのか、霊夢の事が」
いきなりとんでもない発言をするフラガ。
「なっ、ななななに言ってるんですかふふふフラガさん！！」
「……」
あれ、ちょっと顔が赤いですよ、霊夢。
「そうなのか、早苗やっぱりそうだったのか」
「ちちち違い…ますよ？違いますよ…？」
語尾疑問形の早苗。怪しいです。
「否定しないのね…ホントなの？早苗…」
少し顔が赤い霊夢。
「わー。あの霊夢が顔を赤らめてるー。」
バチィン！！
「うっさいわよ馬鹿龍」
「いてぇぇ！！そこ打ったとこ！早苗と衝突事故したとこぉ！！」
のたうちまわるフラガ。すごく痛そうです。
「まったく…」
まだ顔が赤い霊夢。
「うう…」
真っ赤な早苗。

「……」バタバタ
撃墜されたフラガ。
「そうか…早苗は霊夢が好きだったのか…」
「意外っちゃぁ意外だね神奈子」
こっそりついてきた神奈子と諏訪子。
この二人は早苗が可愛くて仕方ないようです。

時刻は午後2時。
お昼ご飯を作ったフラガは、食べてすぐに縁側で寝てしまったようです。
そのすぐ近くに、二人の巫女が座っています。
「まったく…子供みたいな龍ね」
「あはは、そうですね…」
ちらちらと霊夢を見る早苗。その顔は心なしか赤いです。
「あの…霊夢」
「ぁにょ」
「さっきフラガさんが言ってた事…あながち間違いでもないです…」
「え…私だって…その…」
二人の巫女の顔は、木々を彩る紅葉のように赤くなっていきます。
そして、二人の顔は徐々に近くなって…「ぬふふふ…やっぱりそうだったか早苗」
「「!?」」
…明らかに計画的犯行と思われるフラガの声が、二人の接近を阻みます。
「なっ、な、ふ、フラガさ、ど、どうして…」
真っ赤な顔で震える早苗。
「実は起きてましたー。ドッキリ大成功ー♪」
あはははは、と笑うフラガ。なんだか嫌な予感がします。
「おい」

「ひゃい」
霊夢のあまりの迫力に、声が上ずるフラガ。
「お前は、寝たふりをして全部聞いてたのか」
「私は、寝たふりをして全部聞いていました」
敬語になり、冷や汗が流れます。
「……」
「あ、あの…霊夢さ「夢想封印！！！」
ドゴォーン……
その音は、一足先に守矢神社に帰った神奈子と諏訪子にも届くほど、
大きな音でした。

―MIKO and silverdragon―（後書き）

どうも、えふちーです。
はい、今回はレイサナな回でございます。フラガはもうボロボロです。
ご覧のように、フラガは悪戯大好きな馬鹿龍ですが、実は皆の事を考えて行動したりしています。多分…
だんだん若干の百合っぽさが出てまいりました銀の龍と愉快な仲間たち。幻想郷の日常は、きっとこんな感じなのです。
では、第６話でお会いしましょう。

―ｆｏｏｌ　ｆｏｏｌ　ｆｏｏｌ―

第６話
おバカと馬鹿龍

外からは見えることのない、地霊殿。
ここに、とんでもなくおバカな妖怪がいます。
彼女の名前は霊鳥路空。おバカなのになんとなく名前がカッコいい地獄鴉です。
「うにゅ…最近フラガ来ないね、さとりさま」
ちなみにさとりのペットです。
「…分かったわ、会いに行きましょう。お空」
お空が一言言っただけで全てを悟った少女は古明地さとり。さとり妖怪にして地霊殿の主です。
「やったー！！地上に出るのも久しぶりだねお姉ちゃん！！」
さとりをお姉ちゃんと呼び肩を掴んで揺らしまくる少女は古明地こいし。あわわ、そんなに揺らしたら頭がもげちゃう。
「あ、地上に行くんですかさとり様。だったらあたいも行きたいです！」
猫耳三つ編みな彼女は火焔猫燐。さとりのペットです。名前がカッコいいです。
「まあ、皆そんなにフラガが好きなのね」
みんなは、ニコッと笑いました。
そして、一行は地上の銀龍邸に向かいます。途中で鬼や橋姫を拾いながら。

時刻は午前９時。この日フラガはちょっと寝坊してしまいました。
「黒…なんで起こしてくれなかったんだ」

ごしごしと目を擦りながら、自分の髪を解かしている黒狼に話しかけるフラガ。
「いえ、あまりにも主の寝顔が綺麗だったので…つい」
「そっかー…んぅ」
ツッコまない辺り、まだ寝ぼけてるんでしょうね。

ふらふらと寝ぼけながら居間に向かうフラガ。
居間の襖を開けると…
「あ、フラガおはよーう！！」
ズドン！
「おごぁ！！」
まだ眠いフラガのお腹に黒い弾丸、お空が撃ち込まれました。お空と言う名の凶弾に倒れるフラガ。
「ふ…ふふ…あれ、小町…なんでこんな所に…？」
どうやら三途の川が見えるほどの威力だったようです。
「うにゅ？小町さんどこにもいないよ？」
やっぱりおバカなお空でした。

時刻は午前１０時。朝ごはんを済ませて、みんなはのんびりモードに移行しています。
「で、どうしたんださとり。何かあったのか？」
横でお空を撫で回しているネサラディアをあえて無視して、フラガはさとりに聞きました。
「いえ、お空達がフラガさんに会いたいと騒ぐものですから」
「じゃあお姉ちゃんは会いたくなかったの？」
こいしの鋭いツッコミ。
「…お空達がフラガさんに会いたいと騒ぐものですから」
抑揚を変えずにリピートするさとり。でもちょっと顔が赤いです。
「あら、人気者ねフラガ。さとりにまで好かれるなんて」

むにむに。
「あぅあぅあぅー」
お空をむにむにしながら言うネサラディア。お空が大のお気に入りなのです。
「だから、別に私は…」
「じゃあ嫌いなのね？」
ぷにぷに。
「ぅやー」
「…分かりました。私の負けです」
ネサラディアはさとりに勝ったようです。ぷにぷに。

時刻は午後1時。遊びに来たほとんどの人は寝てしまいました。
起きているのは星熊勇儀と水橋パルスィ。二人は途中で一行に拾われて来ました。
お空はネサラディアの抱き枕にされています。むにむに。
「みんな寝ちまったねぇ、フラガ」
「幸せそうな顔して…妬ましい」
「あっはっは、勇儀に抱き締められて幸せ満開なお前が何を言うか」
何故かパルスィは勇儀の大きな胸に抱き締められていました。もふもふ。
「うるさいわよ馬鹿龍。貴方も早く寝てしまいなさい。あと、なんでアンタは私を後ろから抱き締めているのよ」
「んー…可愛いから？」
「…バカ」
そう言ってパルスィはもふもふに顔を埋めてしまいます。
「お前…また胸でかくなったか？服がきつそうだけど」
と、フラガが聞くと、
「ああ、やっぱ分かる？そうなんだよ、最近ちょっと服の胸がキツくてね。新しく作ってくれないかい？フラガ」

「構わんが…測らないと作れないぞ。ちょっとパルスィに測ってもらってこい」
そう言うとフラガは翼に手を入れてもぞもぞし始めました。
「はい、巻尺」
「わ、私が測るの？」
照れたようにパルスィが言います。
「今はお前しかいないだろうよ」
「い、嫌よ！こんなでかい胸を測るのなんて…妬ましい！」
と、真っ赤になって否定していると…
「…私が勇儀のおっぱいを測る？と言うことは勇儀の生のおっぱいが間近で見れる？いや、それどころか計測のためと言って堂々と触れる…！？と思っているのね、パルスィ」
「なっ！？ななな何を…てかいつの間に起きたのよアンタ！！」
「貴方が、勇儀のおっぱい柔らかい…と思った辺りからです」
「最初から起きてたんじゃない！！」
これぞさとりの本領、読心です。
「うわぁ、パルスィ恥ずかしーい。パルスィのエッチー。」
とフラガ。絶対計画的犯行ですね。
「あはは、可愛いなぁパルスィ」
もふもふにパルスィの顔を埋める勇儀。恐らく勇儀も共犯です。
「ぅぐ…バカ…」
本来なら怒り散らすパルスィですが、勇儀のおっぱい効果で怒りが収まったようです。もふもふ。

しばらくして。
「フラガー、測ってきたぞー」
顔を真っ赤にしたパルスィと一緒に、勇儀が帰って来ました。
「ああ、いくつだった？」
勇儀はフラガの耳元で数字を呟きます。
「…センチだ。結構でかくなっちまった」

「ぅおう…スゲーですね勇儀…ネサラディアを抜いたぞ…」
「…」
なにやらパルスィをじっと見つめるさとり。すると…
「…そうですか。やはり勇儀の胸は柔らかかったですか」
いきなり爆弾発言。
「な！！！この…！！（もふ）うぅ…」
途中でおっぱいパワーに屈するパルスィ。フラガとさとりはニヤニヤしています。
「流石さとり。容赦無いな」
「貴方もなかなかですよ、フラガさん」
あはははは、と二人の笑い声が響きます。

ネサラディアがこっそりお空のお尻をむにむにしていたのは秘密です。

―ｆｏｏｌ　ｆｏｏｌ　ｆｏｏｌ―（後書き）

どうも、えふちーです。
勇儀さんの体操服はフラガ製だった、と言うお話です。
あと、百合分が大量添加されています。これから本文を読む、あとがきから読む派の人は気を付けてね☆
えー、それはともかく。
フラガの妻、ネサラディアはかなりの百合っ子でございます。あと実はＢＬ好きです。フラガと黒狼のやりとりを見てニヤニヤしていたりします。
それと、アクセス数が１０００を越えました。ありがとうございます。これからも頑張って連載を続けて行きます。
では、第７話でお会いしましょう。

―What is this？―

第7話
これって何？何なの？

「うむむむ」
「…うーむ」
おや？なんだか難しい顔でフラガと黒狼が悩んでいます。
時刻は午前8時。フラガ達が悩んでいるのは銀龍邸の広い庭です。
「なぁ黒、こんなものうちの庭にあったかなぁ？」
「いえ…無かったはずですが…」
「だよなぁ…うむむむ」
「…うーむ」
珍しく真面目に考え込むフラガと、悩んでいるフリをしてフラガを見つめている黒狼。
「…黒、ちょっと触ってみろよ」
「かしこまりました」
と、フラガに手を伸ばす黒狼。
ぺしん！
「違うわバカ！この変な物体をだよ！」
黒狼の手を撃墜するフラガ。
「これは失礼致しました」
黒狼は何のためらいもなくその物体を手に取ります。
「ふむ…触っても危険は無いようだ。それに意外と軽いですね」
黒狼が手に取ったそれは、何やらレモンのような形をした黒い物体でした。爆弾？

「とりあえずこれが何か分かる奴を探してみよう」
変な物体を抱えたフラガが言います。

「では私もお供致します、主」
「えー…いいよお前は…なんか面倒「主の部屋を物色しますよ？主に下着類の入ったタンス」
「俺が悪かった一緒に行こう」
黒狼の脅迫の前にあっさり屈するフラガ。
「では、出掛けましょう」

何だかよく分からない所の、何だかよく分からないお店、香霖堂。
フラガ達は、物知りなこのお店の店主に聞けば分かるだろうと思ったようです。
「いやぁ…ちょっと僕には分からないな」
期待外れな彼は森近霖之助。このお店の店主です。
「そうかー。まあいいや、なら…新しいパソコン入ってない？」
「ここのところは無いね。慧音はパソコン使えるようになったのかい？と言うか僕にも教えてくれよ」
「慧音はパソコン絶望的だしお前に教えるのもめんどいから不可」
やる気なさそうに言うフラガ。
「では行きましょう主。ここはもう用済みです」
「用済みとかひどい言い草だな…君は」
そう言う霖之助の顔は、ちょっとひきつっていました。

時刻は午前１０時。人間の里は賑わっていました。
「あ、フラガだー！」
「ホントだ、みんなー！フラガが来たぞー！」
「フラガさん久しぶりー！」
里の子供達が、フラガを見付けるなり駆け寄ってきます。
「おぅお前ら、ちゃんと慧音の授業は聞いてるか？」
どうやら子供達は寺子屋の生徒のようです。

「うん！ちゃんと聞いてるよー！」
「聞いても分かんないでしょー」
「なんだとー！」
あはははは、と子供特有の明るい笑い声が里に響きます。
そこへ…
「やあフラガ、珍しいな、探し物か何かかい？」
笑顔で近寄ってきた彼女は上白沢慧音。寺子屋の先生です。
「ん？その抱えてる変なのは何だよフラガ」
ぶっきらぼうに言うのは藤原妹紅。通称もこたん。
「慧音おはよう。探し物ってか…今まさにもこたんが目を付けたこれについてなんだけどな」
「もこたん言うな馬鹿龍」
「む？どれどれ…」
じぃぃっと変な物体を見つめる慧音。
「…うーむ…」
「慧音でも分からないか…困ったな…」
「私も分かんないな」
「もこたんもダメか…仕方ない、他を当たろう、黒」
「もこたん言うな馬鹿龍」

時刻は午後1時。
人間の里で昼食を済ませた二人は、次の目的地へ向かっていました。
辺り一面に障気が漂う、魔法の森。危なげなキノコがたくさん生えていますが、魔理沙曰く、「ここには安全なキノコは無いが、食べて死ぬようなキノコも無いんだぜ」
…食べたんですね、魔理沙…
さて、しばらく森を進んでいると、場違いな…いや、見方によっては結構マッチした白い洋風の家が建っています。

フラガはここの主人に用があるのでした。
コンコン
「入って良いわよー」
家の奥から聞こえる声。どうやらまた何か作っているみたいです。
ガチャ…
「お、上海久しぶり」
ふよふよと空中に浮かんでいるのは上海人形。この家の主人の操り人形です。
「ん？アリスはそっちにいるのか」
上海の案内する道を行く途中、何体もの人形が家事をしているのを見かけました。
「アイツはこの人形全部一人で操ってるんだよな…改めて凄い奴だ…」

「あら、久しぶりフラガ…と黒狼」
手元に顔を向けたまま言うのは、アリス・マーガトロイド。この家の主です。
「ようアリス、これ何だか分かるか？」
「？」
唐突なフラガの言葉に、動かなかった顔を上げてフラガに抱えられた変な物体を見るアリス。
すると…
「ああ、これは、あれね」
「あれって？」
「あれよ」
「あれかー」
「あれなのよ。さ、出掛けるわよ」
「？」
訳が分からないうちに再び外へ出るフラガと黒狼。アリスも後から着いてきます。

「この時間なら神社ね。霊夢の所へ行くわよ、フラガ」
「？？」
ポカンとした顔のフラガ。それでも促される通りに三人で博麗神社へと飛んで行きました。

博麗神社。
「あー、なにか面白い事はないもんかなぁ」
縁側に大の字で寝そべるのは魔理沙。暇人です。
「人ん家来てくつろいどいてよく言うわ」
ずず、とお茶を啜るのは霊夢。暇人です。
「…おっ？」
何かに気付いた様子の魔理沙。
「ぁにょ」
「どうやら退屈せずに済みそうだぜ」
なにやら空を見つめています。
「…？…ああ…」
霊夢も気付いたようです。
ふよふよと神社に向かって飛んでくる三つの影…と小さな一つの影。
フラガ達でした。
「よう霊夢、わけも分からず俺参上」
未だにポカンとしているフラガ。
「は？アンタ何言ってるのよ…ついにボケた？」
「あっはっは、賽銭入れようと思ったのになー」
ちらちらと１００円玉を見せるフラガ。
「今日も若々しくて素敵ねフラガ。流石銀龍だわ」
「…安いなぁ…お前…」
「で、どうしたんだフラガ…って、お前、その抱えてる物は…」
「ん？ああ…お前コレが何だか分かるか？」
「分かるも何も、これはツチノコだぜ！！」

「ふぅん…ツチノコかぁー。……ツチノコ！？」
「なんでアンタが抱えてんのよ！？」
「ほう…これがツチノコ…」
みんなあまりの突飛な発言に驚いたみたいです。アリスを除いて。
「やっぱりそうなのね…確信が無かったけど、魔理沙に見せて正解だったわね、フラガ」
いつの間にか魔理沙を後ろからホールドしながら言うアリス。
「ツチノコくれるのか！？…って、ちょっ、アリス、くすぐったいぜ！」
「あげても良いけど…それ生きてんのか？」
「食べ物を目の前に出せば起きるぜ…アリス！いい加減やめ…きゃ！」
似合わない可愛らしい声を上げる魔理沙。まりまり。
「なるほど、それで昼食を取った時に少し動いていたのですね」
「黒、お前気付いてたんなら早く言え…俺はでっかいレモンの化石かと思ってた」
「まあとりあえず、これは私がもらってきゃああ！？」
お尻を触られたようですね。
幻想郷は今日も平和です。

―What is this？―（後書き）

どうも、えふちーです。
第７話、いかがでしたでしょうか。
フラガと黒狼が謎の物体の正体を求めて幻想郷を旅する、しかし黒狼は気付いてた感があるほのぼのストーリーに仕上げました。
謎だったパソコンや永遠亭のファミコンの出所も明らかになっています。
しかしテレビは扱っていない香霖堂、ではフラガはあの薄型テレビをどこで…！？
答えはＣＭの後！（次話で分かります）
次話では、ついにあの方が登場いたします。
あの方の正体とは…！？
答えはＷｅｂで！（次話で分かります）
今回出そうと思って出せなかったゆうかりんには土下座です。近いうちに出番を…
では、第８話でお会いしましょう。

第８話
スキマと銀の龍

八雲紫。
幻想郷で知らない者はいないと言うほど有名な妖怪なのですが、実際に見たことがある人はあまりいません。
某神社のＲさん曰く、
「しばらく来ないなと思ってるとタンスの中とか机の下から現れる。時々お茶請けのお菓子が無くなっているのは十中八九紫の仕業」とのこと。
神出鬼没、と言う言葉がこれほど当てはまる人はそうそういないでしょう。
スゥ…
「んー…よし、いないわね」
噂をすればなんとやら、いきなり空間が割れて中から紫が出てきました。
ちなみにここは銀龍邸前。紫はいつもここへ逃げ込むのです。
「まったく、霊夢ったらお煎餅くらいで大袈裟ねぇー」
どうやら霊夢のお煎餅をこっそり食べているところを発見されたようです。
ちなみに紫は、フラガより歳上のはずなんですが…幻想郷のお年寄りは皆悪戯っ子な気がします。
「なんだかすごく失礼な事を言われた気がするわ、藍」
ムッとした顔で空を見つめる紫。
すると、スキマからひょこっともう一人。
「はぁ…霊夢が紫様の事を罵ってるんじゃないですか？」
彼女は八雲藍。紫の式神の九尾です。きょにゅうです。もふもふ。

尻尾ももふもふ。
「霊夢になら罵られたって構わないわ！」
「それもどうかと思いますが…」

時刻は午後２時。紫は銀龍邸の居間でくつろいでいました。
「フラガぁー、お茶ー」
と、テレビを見ながら紫。
「はいよー」
「ねぇ紫」
とはネサラディア。またもシャツ一枚です。もふもふ。
「なぁに？」
「藍を撫で回して良いかしら？」
「えっ、それはちょっと…」
「いいわよー」
「ええ！？」
早速藍の後ろに回り込み、そのきょにゅうをわしづかみにするネサラディア。ついでにほっぺで尻尾ももふります。
「ちょっ、ネサラディアさん！？」
「あー、藍ったら全身もふもふね。一家に一台欲しい所だわ」
「良かったら貸してあげるわよ？七泊八日で３００円」
「安！じゃなくて、やめて下さいネサラディアさーん！」
もふもふ。
「はいお茶ー」
あくまで冷静なフラガ。銀龍邸ではこれが日常なのです。もふ。

午後２時。ネサラディアがもふりつつ寝てしまった頃。
フラガが異変を感じとりました。
「！！」

「んー…フラガー、さっきの悲鳴なにー？…ってもういないわね…」
のんびりと動く紫。
「のんびりしてる場合じゃないですよ紫様！今のは遊びの悲鳴じゃありませんよ！」
と、ネサラディアに抱かれたままの藍。
「…一番のんびりしてる貴方に言われてもねぇ…」
「これはネサラディアさんが離してくれないんですー！！」

二人がそんな会話をしている頃。
フラガはすでに悲鳴が聞こえた場所にいました。
「おいフラガ、あれって…」
「間違いない、狗族の下っぱ連中だな…囲まれてるのは…人間の女の子か」
狗族とは、簡単に言うと半分わんこの妖怪です。黒狼も実は狗族の上級種なのです。下っぱと呼ばれるような狗族は、見た目が人間になりきれていないか、なりきれていても頭が弱かったりします。
「フラガ…撃つ？」
「いや…相手は下っぱと言っても狗族が五匹だ。音には敏感だろうよ。離れた場所から撃つには部が悪い…」
「じゃあやっぱりアタシの出番か？」
「…いや、あの程度なら俺だけで十分だ」
そう言ったフラガの顔には、普段の和やかさはありませんでした。

一方こちらは狗族達。
「ひょぉー！コイツ結構可愛いじゃねぇか！」
仲間の一人が奇声を上げます。
「黙れ！見つかったらどうする」
周りの狗族と比べるといくらか人間に近い外見をした、リーダー格

と思わしき狗族がそれを制します。
「あぁ？見つかったらどうするって？どうせこの辺にゃ人間しかいやしねぇんだ…見つかってもぶっ殺しゃあ良いんだよ！！」
「んんー！！んんー！！」
口を塞がれている少女は、泣きながら叫ぼうとしますが、いかんせん狗族の力は強く、口を押さえる手を剥がす事ができません。
「うるせぇぞ女ぁ！」
「きゃあ！」
地面に投げ捨てられ、倒れる少女。
「おい、もうここでやっちまおうぜ！」
一人の狗族が少女の着物を剥ごうと手をかけた時…
ヒュガッ！
「ごぁっ！？」
その狗族が勢いよく吹き飛び、大木に全身を打ち付けます。
「ぐぁぁ…！！」
力なく倒れる狗族。
「まずは一匹…」
周りの狗族も周囲を警戒し始めますが、敵のような影や気配は一切ありません。
「くそ！おい！女を逃がすなよ！！…どこからだ…発泡音も聞こえなかったとなると…」
リーダー格がじりじりと後退し、木に背中をくっ付けます。
ドゴォン！！
「がっ…！？」
物凄い打撃音と共に、また一人の狗族が吹き飛びます。
「二匹…」
「！！」
リーダー格がフラガの声に気付いたようです。しかしどこからなのかが分かりません。
「くっ…！おい！お前、何が目的だ！！」

もちろん罠です。リーダー格は、返答してきた声を頼りにフラガを見付け出そうとしているのです。
「「「さてな、お前に教える義理もない」」」
「！？」
思った通り、返答はありました。しかし、おかしいのです。その声は、３６０度全ての方位から聞こえてくるのです。
「きっ…貴様、一体何を」
ズシッ！！
「ごぶっ…！」
「！！くっ…」
「「「三匹…」」」
また一人の狗族が、地面に叩きつけられて、力尽きました。
「ひ…ひいぃぃ！！」
あまりの恐怖に、少女を押さえていた狗族が逃げ出します。が…
ズガン！！
「ぁが…！」
後ろから衝撃を受けて、真正面の木にぶつかって倒れます。
「「「四匹…あとはお前だけだな」」」
「貴様…一体何者だ…！！」
「「「そうだな…」」」
スゥ…
「！！」
いきなりリーダー格の目の前に現れるフラガ。
「神代に生きた銀の龍、とでも言っておこうか」
そう言って、フラガは呼吸するような自然さで狗族の腹部に蹴りを入れます。
ドガァン！！
「ぁ…が…」
バタン…
リーダー格は後ろの木ごと倒れました。

「…ちょっとやり過ぎたかな…またネサラディアに怒られるな…」
「相変わらず悪人みたいな戦い方だなお前…」
つぶやくフランバージュ。
「なに…俺の本領は暗殺術なんでね。なに、殺しはしなかったがな」
「フラガ…かっこいい…」
「おっと…そうだった」
フラガは人間の少女の元に歩み寄ります。若干怖がっているのは無理もないでしょう。
「ほら、立てるか？里に帰ろう」
さっきまでの血生臭い表情は一切なく、優しく微笑み手を差しのべるフラガ。
「あ…」
少女は、その手をとって歩き始めました。

「あれが…フラガさんの本気…」
「あんなのまだ本気じゃないと思うわよ？多分半分も力出してないんじゃないかしら？幻想右眼しか使ってなかったし」
上からスキマで除いていた紫と藍。
「あれで半分以下ですか…」
幻想郷に、今日も平和が訪れました。

―Ａｓｓａｓｓｉｎ　ｇｕａｒｄｉａｎ―（後書き）

どうも、えふちーです。
うわぁ、やっちまいました。バトル要素濃いですよ今回は、はい。
あと、なんやら良く分からんぞえ？って方は、Ｔａｌｅ　ｔｈｅ　ｓｉｌｖｅｒｄｒａｇｏｎ―ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙを読めばだいたい分かると思います。
えー、フラガは実は悪人みたいな方々で幻想郷を守る、と言うお話でございました。いかがでしたか？
バトルっぽいのはこれでしばらくお休み。次回からはまたほのぼのモードに移行致します（笑）
では、第？話でお会いしましょう。

―Tell a lie―

第９話
お暇な一日

ああ暇だ
ひまひまひまだ
ちょう暇だ

フラガ

時刻は午前９時。黒狼に頭を撫でられている事にも気付かず、フラガは心の中でそんな歌を詠みました。
「…ふぁぁ」
あまりの暇さに欠伸が漏れます。微笑む黒狼。
「…暇だー！！」
ガタン、と立ち上がって叫んでみても暇。今日はネサラディアも出掛けてしまっています。
「…ひまひまーひままーんふふーん」
歌ってみても暇。
「…んゅあーう」
ついにはべたー、っと床に転がってしまいます。黒狼はその隣で微笑みながら控えています。
「…よし！出掛けてくる！」
フランバージュと聖十字をひっつかみ、縁側から勢いよく飛び立つフラガでした。
「行ってらっしゃいませ、主」

「うがぁー暇だー」

ふよふよと空を飛んでいるフラガ。
出掛けてみたは良いものの、どこに行けば暇を解消出来るか分からなかったフラガは、ただなんとなく空を飛んでいました。
「わはははは－！！三十回転行くでやんすー！！」
ギュルンギュルンとまるでライフル弾のように回転しながら飛ぶフラガ。
「おぉぉ…気持ち悪ぅぅ…」
当然です。
そんなフラガがふらふらと飛んでいますと…
ぽふん。
「もが？」
なにやら柔らかい物に当たりました。
「ふ…フラガか？」
当たったものは慧音のおっぱいでした。もふん。
「んが？けーね…？」
もふもふ。フラガは自分が埋まっているのが何か気付いていないようです。
「ああ、私だ。その、なんだ。とりあえず顔を離してくれないかな、フラガ…」
しかし反応がありません。
「ふ、フラガ…あ、あのだな…いい加減……フラガ？」
「……ぐぅ」
おやおや。フラガは慧音のおっぱいで寝てしまったようです。空中で。ふにゃん。

「なぁ慧音さんよぉ」
「なんだ？フランバージュ」
ここは慧音の家。
「相変わらずきったねぇ部屋だなぁ…」

「本がたくさん…」
小さな家です。部屋が汚いです。すごく。
「そうかな？私は普通だと思うんだが…」
「慧音さん…感覚おかしい…」
「だな！よし…フラガ！起きろぉー！！」
「敵か！？」
ガバッと飛び起きてフランバージュを握り、臨戦体勢をとるフラガ。
「ああいや、悪いなフラガ、この部屋を掃除してほしいだけなんだよ」
「へ？ここどこ？」
構えたままフラガはきょとんとしました。

一時間後。
「おぉ…誰の部屋だここは…」
と慧音。
「ふぅ、お前の部屋だよ慧音」
と、汗を流したフラガ。
フラガは、ホントは執事が要らないくらい家事が出来るのです。
「おはよう慧音……悪い、間違えたみたいだ」
いきなり来て帰ったのは妹紅。
「いやいや、ここは慧音の家だぞもこたん」
「もこたん言うな馬鹿龍」
「あー、また馬鹿って言ったな」
「ならもこたん言うなよ」
「まあまあお二人さん、とりあえず慧音の部屋が綺麗になった記念だ、飲もう飲もう！」
「うるさいフランバージュ」
刀のくせに酒を要求するフランバージュ。
「じゃあ酒を買ってくるよ」

と慧音。
「あ、俺ちょっと用事思い出した！」
フラガは、どうやら暇を潰す手段…もとい用事を思い出したようです。

太陽の畑。
季節外れのヒマワリが、大量に咲いています。
一面のヒマワリ畑の中に、赤い屋根のお家が一軒だけありました。
その家のテラスに、赤白チェックの大きなパラソルが見えます。
「ふぅ…やっぱり散るべき時に散ったほうが綺麗なのかしらね…」
ヒマワリ畑を眺めながら紅茶を飲んでいる彼女は風見幽香。このヒマワリ畑は、彼女の力によって咲き続けているのです。
「…また来たわね、あの馬鹿は」
かちゃ、とティーカップを置いて呟きます。
「ゆうかーあぁぁへぶぅ！！」
なんと相当速度の出ていたフラガを素手で止める幽香。
「何か御用かしら？お暇な銀龍さん」
幽香はにこっ、と満面の…しかしとてつもない圧力を伴った笑みを、フラガに向けます。
「ああ、うん。一緒に紅茶を飲みに来た。ついでに手合わせ」
前半の言葉を聞いてちょっとドキッとした幽香でしたが、手合わせ、と聞いてあからさまに機嫌が悪くなりました。
（何よ、この馬鹿は。ちょっとは女心が分かってきたかと思ったら、すぐにこれだわ。まったく。別に好きなわけじゃないけど、断じて違うけど…仮にも女の子に手合わせを申し込むってどうなの？まあ確かに強いのはほとんど女の子だけれど。それにしたってやっぱり馬鹿ね。ちょっと脅かしてやろうかしら）
ここまで考えるのにかかった時間は、一秒。
幽香は黒い笑顔を急に曇らすと、

「そうね…手合わせしたい所だけど、私…もうそんなに動けないのよ」
と言って、今度は控え目な苦笑い。
「え？動けないってどう言う…」
ちょっと真顔になるフラガ。
（もう一押しね）
「あんまり言いたくないんだけど、私…もう長くないのよ。病気でね」
今度は少しうつむき悲しげに。演技が上手いですね。
「え？」
顔から血の気が引いていくフラガ。
（やっぱりこの龍はからかうと面白いわ…さて、もうそろそろ…）
「なんて、じょ「それはまずいな、妖怪に効く薬は…永琳か。ちょっと行ってくる」
（あれ？ちょっと…え？）
普段は羽ばたいてゆったり飛ぶフラガですが、ひとたび空に舞い上がると、翼をコンパクトに畳みます。その姿はさながら戦闘機です。
「あ、ちょっと…今のは冗談…」
ギュオッ！！キィィィン…
フラガはあっと言う間に見えなくなりました。
「これは…ちょっとまずいかしらね…」
幻想郷の空に、稲妻と化した龍が飛んでいました。

―Ｔｅｌｌ　ａ　ｌｉｅ―（後書き）

どうも、えふちーです。
いかがでしたでしょうか。第？話。
えー、ゆうかりんいけない子！
嘘をつくと大抵ろくなことになりません。
ゆうかりんにはどんな結末が待ち受けているのでしょうか。
でも、どんとうぉーりー。心配しないでマイブラザー（マイシスターもいますよね）。悪いようには致しませぬぞ。
では、第１０話でお会いしましょう。

第１０話
嘘の行方

太陽の畑から一分弱で永遠亭に着いたフラガ。珍しく真面目な顔で永遠亭に入って行きます。
ガラッ！
「わ！フラガさん…どうしたんです？そんな顔して…」
洗濯物を抱えたうどんげが言います。
「永琳はどこだ」
半ば脅迫チックに訊ねるフラガ。
「し、師匠ならさっき出掛けましたけど…」
「どこにだ」
「に、にに人間の里ですぅ」
もう涙目のうどんげ。フラガ、顔が怖いですよ。
「分かった。ありがとううどんげ」
ギュン！！
「な…何なんですかぁー…」
へなへなとへたりこむうどんげ。ふむふむ。今日はしまぱんですね。

３０秒後。
人間の里に、薬を売り歩く永琳の姿が見えます。普段ならうどんげが売りに来るはずですが…珍しいですね。
「うーん…あまり売れないわね…やっぱりいつもと違うと怪しむのかしら？」
１００％背中に背負った弓矢が原因です。
「えーりん、妖怪にも効く薬をくれ」

「急に現れたわね、フラガ」
いつの間にか永琳の後ろに立っていたフラガ。
「妖怪って…誰？黒ちゃん？」
「いや、幽香」
「あら…またどうして？」
「病気で長くないって言ってた」
「…？」
永琳は、昨日太陽の畑で幽香とお茶をしていました。その時は全く感じませんでしたが…
（もしかしてあの子また嘘を…）
永琳の予想は当たっています。幽香は普段落ち着いた態度ですが、ひとたびフラガが来ると、面白がって嘘やら冗談を連発します。
（またあの子は…懲りないわね毎回…）
ちょっと呆れる永琳。古き友人はみんなこんな感じです。
「分かったわ。太陽の畑へ行きましょう」
「？薬は」
「あー…、持ってるわ、大丈夫よ」

太陽の畑。幽香はちょっと困っていました。
（どうしよう…フラガ本気にしてたわよね…絶対永琳を連れてくるわ…永琳に嘘がバレたらどうしましょう…）
ちょっと落ち着かない様子。紅茶はもう冷めてしまいました。
「幽香！永琳を連れてきたよ」
ドキーン！
（ホントに連れてきたわあの馬鹿は！どうしよう…このままだとバレる。絶対バレるわ！）
否、永琳にはもうバレています。どうする幽香！
「幽香…」
ダークネス笑顔のえーりん。

（ば…バレてる！？）
もはや顔面蒼白の幽香。どうしたアルティメットサディスティックモンスター。略してＵＳＭ。
「やっぱり顔色が悪いな…」
心配そうに顔を近付けるフラガ。顔色が悪いのは別の理由ですよ。
「あ、いや、これはね、フラガ」
ちょっと赤くなる幽香。
「ん？熱があるのかな？」
ぺとっ、と幽香の額にちょっと冷えた手を置くフラガ。
「ひゃっ！？」
「？どうした」
冷たい手にびっくりして声を上げる幽香。ＵＳＭも形無しです。
「ふふふふふ」
ダークネス笑顔のえーりん。楽しんでますね。
（ちょっ…永琳、分かってるんでしょう！？助けて！）
（い・や♪）
読唇術。無駄なスキルですね。
「とりあえず部屋に入ろう。体に障る」
と言って、ひょいと幽香を持ち上げるフラガ。
「きゃあきゃあ！！嘘！嘘よ！病気とか全部嘘ぉ！！」
「ぷっ」
「へ？」
ポカンとするフラガでした。

「まぁーた俺をだまくらかしたわけだな、幽香」
「う」
あのＵＳＭを正座させるフラガ。その迫力はまるで龍。いや、龍なんですけど。
「うふふふ」

にこにこと満足気な永琳。この人が真のＵＳＭな気がします。
「なんで騙したのか３０文字以内で述べよ。１０秒以内。いーち、にーい」
「ちょっ、ひ、暇だったから！」
「はいダメー。そんなのは理由として認められません。よって被告にはそれなりの罰が与えられます」
いつの間にか被告になっていた幽香。謎のノリに困惑気味です。
すると笑っていた永琳が、
「判決、被告をくすぐりの刑に処する♪えい♪」
と言って幽香に飛びかかりました。
「え？あ、あはは！ちょっと永琳、やめ、あはははは！」
くすぐられてのたうちまわる幽香。もうただの女の子です。
「あはは！あはははは！あ、ちょっと永琳！そこはダメ！永琳！あは、きゃあ！」
きょにゅうをもふもふ。
「あら、幽香また大きくなった？」
「そんなこと、ん、ないわよ！あはは！」
もう何がなんだか分からなくなってきた幽香。
幻想郷は今日も平和です。むにむに。

―YUUKA is liar―（後書き）

どうも、えふちーです。
ゆうかりんは大変な永琳にもふられてしまいました。みたいなお話です。
やっぱり嘘は良くないですね。みなさんも嘘は程々に（笑）
さて、この第１０話は前話の続編となっておりますので、こっちから先に読んじゃった方は第９話もどうぞ。まあ、この回だけでも楽しめるようにはしたつもりですが…。
銀の龍と愉快な仲間たちを執筆し始めて３日。ついに１０話になりました。ここまで来れたのも読んでくださる読者様方のおかげです。
アクセス数が伸びなかったら多分拗ねてました（笑）
なにはともあれ、これからも応援よろしくお願いします。
では、第１１話でお会いしましょう。

第１１話
ほのぼの紅魔館

時刻は午前９時。
「ぐぅ…ぐぅ…」
上のイビキからも分かるように、ここは紅魔館。
今日も美鈴は元気にお昼寝しています。
「…はぁ、こんな早い時間からサボってるのね美鈴…」
美鈴の横にいきなり現れたのは咲夜。ホントにいきなり現れました。
びっくりです。
（…寝顔可愛いわね美鈴…はっ！いけないいけない）
なにかよからぬ想像をしようとする自分を戒める咲夜。
でも…
（ちょっとくらいならいいわよね？きっと良いわよ。うん）
と、美鈴のおっぱいに手を伸ばしていきますが…
「！！曲者っ！覚悟ぉー！！」
「へ？」
いきなり目を見開き、咲夜に正拳を打ち込む美鈴。
ピタッ
「…咲夜さん？」咲夜のお腹すれすれで止まる美鈴の拳。美鈴の額に冷や汗が流れます。
「ねぇ美鈴…？」
「はひ」
「曲者って誰の事かしら？」
自分のしようとしたことは棚に上げてピキピキと怒りだす咲夜。
「いや…その…咲夜さん私の胸触ろうとしてましたよね…？」
「ふぇっ！？」

どうやら気の達人である美鈴にはバレていたようです。間抜けな声を上げる咲夜。
「いきなり胸を触ろうとするもんですから曲者か痴漢かと思って…」
「なっ！ち、痴漢じゃないわよ美鈴の馬鹿！」
顔を真っ赤にして大声を上げる咲夜。可愛らしいです。
「あれ？胸を触ろうとしてたことは否定しないんですね」
「あっ…う、あうぅ…」
あまりの羞恥に沸騰する咲夜。
「ふふ、言ってくだされば胸くらい触らせてあげるのに」
「えっ！？う、あ、うぅぅぅ…」
もはや言葉すら発せない咲夜。微笑む美鈴。
これが、紅魔館のいつもの風景なのです。

「うひゃあー…意外とSっぽかったなぁめーりん…」
呟きながら門の上空を通過し、紅魔館に入るフラガ。門では美鈴のおっぱいをむにゅむにゅする咲夜が見えました。
「いや、咲夜が意外とMなのかな…うむむ」
「美鈴は別にSじゃない。咲夜がMなんだよ、フラガ」
ロビーの階段から降りてくるレミリア。
「ぉあよ、レミリア。外で美鈴と咲夜が戯れていたよ」
「なに、別に従者同士の戯れを咎める気はないさ…私は心が広いんだ」
「自分で言っちゃうあたりどうだかなぁ」
「こら、うるさいよ馬鹿龍」
仲が良さそうな二人の賢者（？）。
「ところで今日はどうしたんだい？暇つぶしって訳でもないんでしょう？」
「ん？ああ、例のごとく借りてた本を返しに来たんだよ」
「なんだ、パチェに用があるのか」

ちょっと残念そうなレミリア。
「私はてっきりワインでも飲みに来たかと思ったよ…どうだい？なんならとっておきのを出すけど」
「とっておきならお前の可愛い妹と飲みねぇ」
「む…フランは酒に弱いのよ」
フランの名前を出されてちょっと赤くなるレミリア。
「ま、とりあえず用を済ませてくるよ」

見渡す限りの本、本、本。飛ばなければ届かない高い本棚に乗る、銀龍。
「うわわわわ、パチュリーとこぁが言い感じだーうひひ」
ちょっと悪人ぽく笑うフラガの視線の先には、お互い顔を赤らめてにこにこお話するパチュリーと小悪魔。
「あの無愛想なパチュリーがあんなにねぇ…ふむふむ」

「ええ、ですからこの本はお薦めですよ、パチュリー様♪」
「まあ…小悪魔が薦めるのなら面白いのね。今度読んでみるわ」
ほのぼの幸せムード全開の二人。
小悪魔が持つ本をパチュリーが受け取ろうとした拍子に、手が触れ合います。
「あ…パチュリー様…」
徐々に赤くなっていく小悪魔。
「…なによ…」
不機嫌そうにそっぽを向くパチュリー。でもお顔が真っ赤ですよ。
「…」
「…」
二人の顔が、だんだん近付いていきます。
「っと、これ以上のぞくのは流石に失礼だな」

と呟きながら借りていた本をそっと本棚に戻し、気付かれないように図書館から出るフラガの顔は、（良い意味で）にやけていました。

時刻は正午。
コツコツと音を立てて長い廊下を歩くフラガ。その手には料理の乗ったカート。
他の扉より少し高級そうな扉をノックします。
コンコン
「入りなさい」
促されて中に入るフラガ。
「レミリアお嬢様、昼食をご用意致しました」
と、入るなりうやうやしく一礼すると、
「滅多な事は止めなさい。似合ってるけど…槍が降るわ、槍が」
にやにやしたレミリアに茶化されます。
「ぁんだよ、せっかく人が昼飯を用意してきてやったってのに」
「…ってホントに用意してきたのね。咲夜はどうしたの？」
「んー、色々疲れてるみたいだったから休ませたよ。ダメだったかな？」
「いや、構わない。アイツは働きすぎるからね…たまにはいいだろう。もっとも…今日疲れてるのは別の理由かしらね」
ますますにやにやするレミリア。悪だ。この笑顔はまるで悪や！
「まあとにかく昼飯。お前の好きな洋食です」
「ん、ありがとう。…やけに多くない？アンタも食べるのかい？」
「いや、俺はキッチンで食べてきた」
「？じゃあ誰の」
昼食だい？と聞こうとして、バタン！と扉が勢いよく開かれる音にそれを遮られます。
「あ！やっぱりここにいたー！フラガぁ！お腹すいたよー！」
入ってきたのはフランでした。

「コイツの分さ」
「そのようね」
「あ、私の分もあるのー！？ありがとーフラガ！」
にぱぁ、と満面の笑みを浮かべるフラン。
「あいよ、ゆっくり食べなさい」
「はーい！」
「頂くわね」
「はい、召し上がれ」
そう言ったきり、黙ってソファに座って笑顔で二人を見守るフラガは、まるで二人のお父さんのようでした。

―Faintly scarlet mansion―（後書き）

どうも、えふちーです。
うわぁお！自分でもビックリするくらいの百合なお話です！
あの子とあの子があんなんだったり、え！？まさかこの子まで！？
な回になっております。
なんていうか、超絶のんびりなお話が書きたかったんです、はい。
えー、この第１１話、執筆に二時間以上かかりました（笑）恥ずかしくて…
ちなみに他の話はみんなだいたい一時間くらいで書いております。
推敲もなにもありません（嘘です、流石に文の推敲くらいします）。
次回！なんとあの二人が意外な行動を…！？
では第１２話でお会いしましょう。

第１２話
鬼の暇つぶし

風になびく金髪。長めのスカートに、なぜか半袖の体操着。体操着を持ち上げ、歩くたびに揺れる二つの大きなもふもふ。そして、星印の描かれた赤い一本角。
彼女は星熊勇儀。幻想郷にいる二人の鬼のうちの（色々）でっかい方です。
そんな超目立ちまくりの勇儀が、暇そうに頭の後ろで手を組みながら、適当に人間の里を歩いています。ぷるんぷるん。
「あー暇だ。どっかにフラガとか落ちてねぇかなぁー」
具体的に落ちていてほしい物を良いながら里を闊歩する勇儀。ぽよんぽよん。
そんな勇儀（の一部分）を見て、男、時には女の子がおぉ、と感嘆の声を上げます。
「ん？なんだ？酒なら持ってねぇぞー。あはは！」
からからと笑う勇儀。実に男らしいです。ぷよん。
「うーん…落ちてねぇなぁ」
本気で落ちてるフラガを探す勇儀。
「よし！銀龍邸に行こう！」
最初からそうすれば良かったのに…

時刻は午前１０時。勇儀が銀龍邸に向かって歩き始めて１０分後。

「たのもー！フラガ、たのもーっ！」
「道場破りか、お前は」

「うぉ！なんで後ろから来るんだフラガ！」
後ろから、紙袋を持ったフラガに声をかけられてビックリする勇儀。
「なんでって…人間の里からずっと後ろ歩いてたんだが」
「おわぁマジか！相変わらず気配が無さすぎて気付かなかったよアタシは！あはは！」
からから。大笑いする勇儀。おっぱい揺れまくりです。ぷるるん。
「朝からテンション高いな…酒、は飲んでないみたいだな」
見てみると顔は赤くありませんし、お酒の臭いもしません。つまりこれがデフォルトなのです。勇儀、こわい子。
「そう言うお前が持ってる紙袋は…酒が入ってるな？ん？瓶の音がしてるよ？」
にやにやしながら迫る勇儀。
「残念。これは漬物の入った瓶だよ」
と言ってすたすた家に入っていくフラガ。
「嘘つけ馬鹿龍♪」
ひょい、と紙袋に入った瓶を正確に抜き取る勇儀。その瓶は本当に漬物の瓶でした。
「馬鹿はお前だ馬鹿鬼。黒ー！勇儀に酒を出してやってくれー！」
屋敷にいるはずの黒狼に声をかけるフラガ。
「気が利くねぇ、フラガ♪」
そう言って二人は家に入って行きました。

「…お前ら…」
フラガは居間に入るなり、ひくひくと青筋を立てて震えています。
居間で、お互い半裸で絡み合っているのはネサラディアともう一人（色々）小さい鬼、伊吹萃香。
「んむ、ネサラディア、ぁふ…フラガが帰ってきた、から…もうやめ…んんっ」
お酒の臭いがぷんぷんします。臭いだけで酔ってしまいそうなくら

い。テーブルに酒瓶が無いので、どうやら萃香のひょうたんから出るお酒を飲んでいるようです。
ネサラディアは夢中で萃香を舐め回し…もとい撫で回しています。
「…ネサラディア、おい」
（萃香の顔も赤いが、多分酔いとは別の理由。しかも正気を保ってる。つまり萃香は酔ってない。多分。てかこんなタチの悪い酔い方すんのはネサラディアくらいだろうなぁ…はぁ）
「ふ、フラガ、たす…あっ、助け…ぅあ」
すでに満身創痍の萃香。
「むぐぐぐ…コイツ、力強っ、あががが」
引っ張っても剥がれないネサラディア。
「勇儀！さっきから何黙ってんだ！ちょっと手伝え！」
フラガが勇儀を見ると…
「ふ、フラガ、す、すいかとネサラディアのは、はだ、はだか」
異常に顔を赤くして、きょろきょろと目が泳いでいる勇儀。
「な、何言ってんだお前！何その純情っぷり！お前ホントに鬼か！？」
あわあわと挙動不審になる勇儀の腕を掴み、ネサラディアを引っ張らせようとした拍子。
むにゅ
「はわ！？ね、ねねねネサラディアのむむ胸あわわわわ」
きゅう、と失神してしまいました。
「ちょ、え？おい勇儀！おま、えぇ！？」
「んふふ…すいかぁ」
「は、はや…く…んぁ、助けて…」
もう居間は大混乱。
「く、黒！黒はどこだ！黒ぉ！」
しかし返事はありません。どうやら巻き込まれる前に逃げたようです。
「ど、どうしろと？俺にどうしろと言うんだ！」

ほっとけばいいかと…

午後1時。色々試してみたけれど、どうにもならなかったので、フラガは拗ねて縁側で寝てしまいました。
勇儀がむくっと起き上がります。
「あ、あれ？フラガが寝てきゃあああああ！！」
再び絡み合う二人を見て似合わない叫びを上げる勇儀。
「そ、そうだった、ネサラディアをはがさないと！」
萃香の、そして勇儀の運命やいかに！？

―pure ogre―（後書き）

どうも、えふちーです。
ぽよんぷるんむにきゃあああああ！な第１２話。いかがでしたでしょうか。
もうね、あれですよ。純情勇儀萌え。鼻血大噴火。ボルケイノ！！
次話はこの話の続編となります。勇儀は果たして純情の壁を越えられるのでしょうか。どきどき。
あと、出来るだけ感想くれたりするとサービス増えたり…（笑）
では、第１３話でお会いしましょう。

―Sleep in sanctuary―

第13話
百合、時々…

フラガが拗ねて、勇儀があわあわしている頃。
黒狼はフラガの寝室ですやすやと寝ていました。
彼にとってフラガの部屋は自分の部屋よりも安心できるユートピア。
彼はフラガの布団でごろごろしているうちに、ぐっすりと熟睡してしまったようです。
幸せです。あまりに幸せなもんですから、フラガの助けを呼ぶ声にも気付きませんでした。ふかふか。

「あわわわわわ、どうしよう、これどうしよう」
がたがたと震えているのは勇儀。意外とピュアだったこの鬼は、目の前で起きている光景に対処できずにいました。
「いや、だってさ、これ…ね、ネサラディアの、おおおおっぱい！ネサラディアのおっぱいだぞ！？」
なんだか急に一人で言い訳を始める勇儀。
「ゆ、ゆぅぎ…早く…あっ、あぁ…」
目が虚ろでそろそろ危ない萃香。
「んふふ…萃香可愛いよ萃香」
こちらも別の意味で危ないネサラディア。
「な、なんで、は、は、はだかで、あわわわわわ」
この期に及んでまだ挙動不審な巨乳の鬼。早く助けてあげないと萃香が何か危ない扉を開けてしまうぞ！立ち上がるんだピュア鬼・勇儀！
「あ…あた、あたしも…」

「あら、あなたも？いいわよ。うふ、うふふふ」
ぶっちゃけ興味津々だった勇儀は、そのまま二人に混ざってしまいました。萃香は危ない扉を開けてしまった！ぷるん。

「…しまった、寝てしまいましたか…」
ちょうど勇儀と萃香がニューワールドへ突入した頃、フラガの布団でごろごろ寝ていた黒狼が目を覚ましました。
「…もう４時…仕事をしなければ…」
寝癖がついた耳を整えて、黒狼は居間に向かいます。
（酒の臭いが凄い…飲んでいるのか）
ガラッ
「すみません主、どうやら少し寝て…しまった…ようです…」
黒狼の目に飛び込んできたのは、めくるめく百合☆ワールド。
「…失礼しました？」
バタン。
語尾疑問形で居間を去る黒狼。
「…まだ夢を見ているのでしょうかね…いたた」
夢ではありません。百合☆ワールドです。またの名をネサラディア・サンクチュアリィ。
「そうだ、主は…」
くんくん。
鼻を利かせて自分の主人の臭いを探す黒狼。お酒の臭いに混じった、嗅ぎなれた臭いを見付けます。
（ん…縁側か…）
縁側へは居間から行った方が近いのですが、居間はもはやサンクチュアリィ。黒狼は、一度外へ出てから縁側へ回る事にしました。

「主、すみません。少し寝てしまったようです」
寝転んでいるフラガに声をかける黒狼。しかし返事はありません。

「…？ああ、主もお休みになられているのですね」
上から顔を覗き込むと、すやすやと気持ち良さそうに眠る主人の顔。
黒狼の中に、欲望が渦巻きます。
「…っと、流石に寝ている人に手を出すのはいけませんね」
思い止まる黒狼。
「しかし、ここで寝ていたら風邪を引いてしまいますね…っと」
ひょい、と軽々フラガを持ち上げる黒狼。お姫様抱っこで。お姫様抱っこで（大事なことなので二度言いました）。
「んぅ」
いきなり動かされ、フラガはちょっと声を上げます。
「う…悩ましい声ですね…」
黒狼欲望ゲージ上昇。ギリギリグリーンゾーン。限界値まであと3段階です。
そのまま庭を通って玄関に向かう黒狼。途中、強めの冷たい風が吹きます。
「うぅ…さむ」
寒くて体を縮こめ、何かを掴もうとするフラガ。恐らく布団を探しているんでしょう。その手は、黒狼の肩を掴み、そのままぎゅっとしがみつきます。
むぎゅう。
「！あ、主…」
黒狼欲望ゲージ上昇。警告、レッドゾーン。警告、レッドゾーン。限界値まであと1段階です。
一気に2段階の攻撃を受けた黒狼は、いかんいかんと首を振り、何とか家に入ります。
フラガの部屋に入り、布団にフラガを寝かせると…
「あふ、黒…」
「！！」
ずぎゃーん！！
自分の名前を呼ばれ、欲望ゲージは限界値を振り切り、爆発。黒狼

の手は、細かく震えながらフラガの顔に伸びていきます。
「主…」
完璧執事はどこへやら。黒狼は、そのままフラガに口付けをしようとし…
「おい」
「は、はい！」
フラガが起きました。目が怖い。目が怖いです。寝起き＋目の前の執事の顔で、フラガの不機嫌は最高潮です。ああ、あわれ黒狼。彼は、若くして夜空に光る星となるのでしょうか。
「お前、主人に何をしようとした。ん？今。こら」
「い、いえ、あの…」
普段の落ち着き払った黒狼からは想像出来ないくらいの焦りよう。ある意味レアです。
「いえ、じゃありません。貴様は、寝ている主人に、何をしようとしましたか」
ついに敬語が入るフラガ。表情が激しくないだけに、余計怖いです。
「そ、その、く、口付けを…」
「それはまことか」
「まことでございます…言い訳のしようもございません」
死を覚悟し、目を瞑る黒狼。しかし…いつまでたっても拳、あるいは足が飛んできません。何事か、と思って目を開けると、
「何をしてる、早く、髪」
ボッサボサの髪をぶんぶん振りながら言うフラガ。
「は、はい。かしこまりました」
慌ててクシを取る黒狼。
「あ、あの、主」
「ぁい？」
ほげっとした感じの返事をするフラガ。
「ば、罰は与えないのですか？」
恐る恐る訊ねる黒狼。

「んー、今日は特別に許してやります。その代わり夕飯にはなにか美味しい物を出しなさい。以上」
そう言うと、フラガはふわぁぁ、と欠伸をします。
「か、かしこまりました」
ほっとしたやらちょっと残念やらで力が抜ける黒狼。今日の夕飯は豪華になりそうです。

一方、居間…もといサンクチュアリィ。
「はっ！？」
がばっと飛び起きるネサラディア。周りには半裸で眠る二人の鬼。
「…？何よこいつら…？襲ってほしいのかしら？」
いやいや、もう襲ったんですよ。
「あいたた、頭痛い…寝るぅ」
ぽふ、と勇儀のおっぱいにダイブして再び睡眠の体制に入るネサラディアでした。もふん。

―Sleep in sanctuary―（後書き）

どうも、えふちーです。
執筆中あまりの恥ずかしさに顔からボルケイノ。
今回はほのぼのなんだかえろえろなんだか良く分からないお話になっております。
別に皆の普段と違う一面が書きたかった訳じゃないんだからね！！
（笑）
この第１３話は執筆に三時間を要しました。もうね、恥ずかしかったのです。しかし手を抜けば私が求めるお話にはならない。と言うことでボルケイノ。もふん。
えー、いきなりですが読者の皆様へお願いです。詳しくは私の活動報告を読んでいただきますよう、お願いします。
次回！フラガが再び戦います。
では、第１４話でお会いしましょう。

―Disaster―

第１４話
災いの予感

時刻は午前１０時。だと言うのに、幻想郷は何故かもう薄暗く、湿った風が吹いていました。
白玉楼。幽々子は、縁側に腰かけて暗く淀んだ空を見つめていました。
「…もう、来るのね」
と、一言呟き、それっきり黙って空を眺めています。

一方、こちらは博麗神社。
神社でも、霊夢が異変を感じ取っていました。
「…魔理沙」
「ああ」
「来るわね…ずいぶん早いけど」
「出るのか？」
「…まだ分からないわ。私達はアレの力を知らないもの。ただ…場合によっては私達が出ても邪魔なだけよ」
ぎり、と奥歯を噛み締める霊夢。霊夢は、今回はもう自分達が役には立たないと半ば悟っていました。

永遠亭では、兎達が庭ではしゃいでいました。
しかし、そんな和やかな雰囲気とは無縁の険しい空気が、永琳と輝夜の間に生じていました。
「ねぇ、永琳？」
「なんですか姫様？」

「今回はどうなるのかしらね」
「さあ…でも、とても大きな力ですわ。これは」
顔からは笑みを絶やしませんが、声には異様な緊張感がありました。
「そうね…でも、彼らならきっと大丈夫だわ」
そう言う輝夜でしたが、不安は隠しきれていませんでした。

異変を感じて、朝早くから、一人小高い丘に佇むのは、ヴァルキリー。その表情は…まるで歴戦の戦士でした。
「また、やらねばならぬのか…」
遠い遠いどこかを見つめるような目で、天にかざした愛剣を見ます。
「なぁ…私はまた血にまみれなければいけないのかな、シグルズ…」
その目には、何故か悲しそうな色が浮かんでいました。

「…こんなに早くお前を起こす日が来るとはな。それほど奴は力が強いのか…」
銀龍邸の地下。大きなカプセルに手を触れて、懐かしげに微笑むのはフラガ。
空中に現れた操作板をいじると、プシュー…、と煙を吐き出しながら、カプセルが開きました。
「なぁ…リニア」
リニアと呼ばれたその少女は、奇妙な出で立ちをしています。
肘や膝などの関節には、まるでからくり人形のような球体。耳と思われる先細りの板には、『Ｆｒ－０１　ｌｉｎｅａｒ』の文字。薄い茶色の瞳には、カメラのレンズのような模様。リニアは、首の後ろに付いたケーブルを自分で引き抜くと、
「システムオールグリーン。Ｆｒ－０１、再起動します。…お久しぶりです、マスター。」
と、フラガを見つめて言いました。

「久しぶり。悪いな…意外と早く来たみたいだ」
「問題ありません。目標は？」
「まだ現れてないが、間違いなく…」
「了解しました。右肩部１ｍｍレーザー、左肘部３０ｍｍスモールバズーカ、粒子振動ブレードの点検をお願いします」
「分かった」
なんだか訳の分からない会話です。そこへ…
「あ、やっぱりリニア起こしたのね」
長い何かをいじりながら入ってきたのは、ネサラディア。
「うん…間違いなくリニアの力が必要になるからな…って、整備なら俺がするから置いときな」
「ん、分かった」
と言って持っていたライフル銃を壁に立て掛けるネサラディア。すると…
「あら、久しぶりに起こされたと思ったら…こんなところに置くなんて随分な仕打ちね」
そのライフル銃が黒髪の少女に姿を変え、ぷんぷんと怒り始めました。
「ああ、俺が整備してやるんだ。ソーウィル」
「そういうこと」
「まあ…それなら仕方ないわね」
その少女はソーウィルと呼ばれました。
「ヴァルキリーは？」
とはフラガ。
「多分無名の丘ね」
「やっぱりな…グラムは？」
「持ってったわ」
「それなら大丈夫か…」
グラムとは、ヴァルキリーがある龍殺しの剣士からもらったドラゴンスレイヤー。天にかざしていたあの剣です。

「龍の仲間に龍殺しねぇ…やっぱり変よね」
「まあな。でもヴァルキリーは俺たちを裏切りはしないさ…よし、点検完了！異常はないぞ」
「ありがとうございます、マスター」
ぺこ、と頭を下げるリニア。
「さて、次はソーウィルか…間に合うかな？」
「まあ、大丈夫でしょう」

人も妖怪も近付かない高い高い石の塔。
その上空の一点に、周りの黒い雲が集まっていきます。

カッ！！

一瞬、幻想郷全体を包み込むまばゆい閃光が走ります。
塔は消えていました。塔の代わりにそこに立つのは、流れるような金髪の、一人の少女剣士。

「…ここに、アイツが…長年探してきた、アイツがいる！！」

幻想郷に、大きな大きな災いが、降りかかろうとしていました。

―Ｄｉｓａｓｔｅｒ―（後書き）

どうも、えふちーです。
第１４話、いかがでしたでしょうか。この話は、次話の導入となっております。
今回はほのぼの（あと百合）分が無いです。えー…なんて言いますか…どうしても書いておきたい話なんです。萌え系が好きな方、ごめんなさい（泣）１６話からはまたのほほん編に戻りますので！
あと…色々努力はしてるんですが…何故か感想が書かれない…ユーザー登録してない読者様が多いんですかね？（汗）なんにせよ、少ない意見でも頑張らなければならないことは事実でございます。
点数入れてくれた方、ありがとうございます。出来たら感想も…（悲願）
次回、ついに始まる戦い。フラガ達の、そして幻想郷の運命は…！？
では、第１５話でお会いしましょう。

―meet again―

第１５話
災いとの再会

塔の跡に立ち、剣をまじまじと見つめる金髪の少女。
「…やっぱり私にチャンバラは似合わんかな」
と言うと、手に持った剣にヒビが入り、粉々に砕け散ります。
「気付いているんだろう？待っているぞ…フラガ・ヴァルキリオン！私の追い続けた龍…！」
少女はニヤリ、と不敵な笑みを浮かべました。

「…来たな」
「来たわね」
キュィィ…ピピッ。
「目標の魔力を確認。現在地から北東に約１２７００ｍ、ヴァルキリー様のいる地点から北に約７２００ｍの地点。廃塔のある場所です。ヴァルキリー様は移動を開始しています」
詳しく位置を割り出し、報告するリニア。
「出来うる限界速度で飛ぶとどの位かかる？」
「最低２０分はかかります」
「分かった…ヴァルキリーはどの位の速度で移動してる？」
「正確ではありませんが、約時速３ｋｍです」
「歩いてるのか…よし、途中で拾って行こう」
そう言うと、部屋から出ようとするフラガ。
「おいフラガ！アタシ達は連れてってくんないのかよ！」
「フラガは、素手で戦う」
「お、分かってんな聖。そう言う訳で行ってくるよ」

再び背中を向けるフラガに、フランバージュが、
「おいフラガ！…死ぬなよ？」
と心配そうに声を掛けました。
「うーん…死にはしないと思うけど…アイツは気分屋だからな。何するかわからん…ありがとうフランバージュ。行こう、ネサラディア、リニア」

こちらは無名の丘。ヴァルキリーはゆっくりと歩きながら、目前の決戦について考えていました。
（奴はきっと、私など簡単に捻り潰すだろう。最初からフラガと奴の一騎討ちのようなものだ。だが…）
それでも。
（逃げるわけにはいかない。銀龍軍の幹部として、そして魔剣グラムの名にかけて！）

「…まだ来んのか…」
塔の跡に降り立って五分。少女は、フラガ達がすぐに突っ込んで来るだろうと思っていました。
「まあ…向かってきてはいるのか…ん？」
何かに気付く少女。その青い瞳は、まっすぐ小さな岩を見ています。
「そこの妖精共」
ビクッと反応するのは大妖精とチルノ。
「悪いことは言わんからもう帰るといい。そのままここにいれば…見たくないものを見るやも知れんぞ？」
ニィッ、と笑みを浮かべる少女。
「あ、アンタは一体誰なのよ！」
と、チルノが訪ねると…
「私か？それは後でフラガに聞くといい」

「？なんでフラガが出てくるのよ！」
「ち、チルノちゃん！」
少女はふぅ、と溜め息をつくと、チルノを見つめて言いました。
「分からんか？帰れ、と言っとるんだ」
「う…？ぁ」
バタッ
急にチルノが倒れます。
「チルノちゃん！！」
チルノを抱き起こす大妖精。
「安心しろ。気を失ってるだけだ…早くその馬鹿を連れて帰るといい」
大妖精は、何故かぺこっとお辞儀をしてから、チルノを抱えて飛んでいきました。
「…ハァ…これだから妖精ってのは嫌いなんだ…全く」
ポリポリ、と頭を掻く少女。意外と悪い人じゃないのかも知れません。
「ん？…来たな。待っていたぞ、フラガ」

とことこ歩くヴァルキリーを途中で拾ったフラガは、ネサラディアとヴァルキリーの二人を抱えて飛んでいました。
「いた！」
「目標確認。攻撃を開始しますか？」
いきなり物騒なリニア。
「落ち着きなさいリニア」
抱えられたネサラディアが言います。ヴァルキリーは先ほどからうつむいたままです。
「よし、降りよう」
フラガ達は、少女の目の前まで来て降りました。
「久しいな、フラガ」

ニヤ、と笑みを浮かべる少女。やっぱり悪人ぽいです。
「よう、エヴァンジェリン。何年ぶりだ？」
少女の名前はエヴァンジェリン。最強の吸血鬼です。
「２０年だ…それだけの時間、様々な場所を飛び回った」
「２０年だって？こっちでは3年しか経ってないんだが…そうか、２０年ねぇ…そのわりには…」
エヴァンジェリンを見下ろして言うフラガ。ちなみにフラガの身長は１８５ｃｍ。エヴァンジェリンはだいたい１３０ｃｍ。２０年経っても埋まらない身長の差。
「う、うるさい！久しぶりに会ったと思ったらそれか、貴様！」
「いやぁ、すまにゃいなエヴァ。あまりにも小さいもんですから…あまりにも小さいもんですから！」
「二回言うな！このボケがー！」
がーっ！っと怒るエヴァンジェリン。
「まあまあ、そう怒るな、エヴァ。とりあえず…ヴァルキリーの相手をしてやってくれ」
ボソボソと言うフラガ。後ろには物凄い魔力を発するヴァルキリーの姿があります。
「ったく、まだ懲りとらんのか…仕方ないな…」
フラガから離れ、ヴァルキリーの元へ向かうエヴァンジェリン。
「エヴァちゃん、分かってると思うけど…」
ソーウィルを構え直して言うネサラディアを遮って、
「分かってるよ、なに…もう殺しはやめたんだ。お前の旦那は会った瞬間気付いていたぞ？」
「…」
ソーウィルを下ろすネサラディア。
「まあ…気持ちは分からんでもないさ。何せ私は、コイツの…」
「それ以上言うなよ、闇の福音。それ以上言ったら殺しを止めた貴様を殺してしまいそうだ」
グラムを握りしめて震える声で言うヴァルキリー。

「ヴァルキリー…」
「分かっている。殺しはしない」
「さっきから殺すだの殺さないだの…誰に向かって言ってるんだ？ん？」
「！？くっ…！」
「おー」

いつの間にか、エヴァンジェリンはうつ伏せのヴァルキリーの上に座っていました。
「貴様…！」
「諦めろ、まだ私には勝てんよ」
「くそ！」
圧倒的な力の差を見せ付けられて、地面を頭突くヴァルキリーでした。

「さて、フラガ」
エヴァンジェリンはすくっと立ち上がってフラガに向き直り、笑顔になります。
「うん、そうだな」
同じく笑顔で返すフラガ。次の瞬間、
ガッ！！
空中でぶつかる二人の拳。その顔はまだ笑顔のままです。
「！」
「ヴァルキリー、離れるわよ！リニア、手伝って！」
「了解しましたネサラディア」

ガッ！パシッ、ブォン！
「どうしたフラガ、少し遅くなったか？」
「あはは、結構平和なもんでね…交戦は3年ぶりかな」
狗族を掃除したのは、フラガにとって交戦ではなく殲滅です。

「こっちにきてから一度も本気は出してないのか、ハハハハハ、どうりで」
すっ
「遅いわけだな」
後ろに回って背中に蹴りを入れるエヴァンジェリン。しかし…
「はは、お前が速くなったんだよ、エヴァ」
「もが！？」
エヴァの後ろに回り、頭をホールドするフラガ。速いです。
「んむぅー！！」
だんだん顔が赤くなっていくエヴァンジェリン（息が出来てない）。
「あ、悪い悪い！あはははは！！」
けらけらと笑うフラガ。
「な、舐めてるのかお前！」
「いやぁ？あまりに小さくてよく分からなくてさぁーうひひ」
あ、だんだんフラガの方が悪人に見えてきました。

―meet　again―（後書き）

どうも、えふちーです。
いかがでしたでしょうか、第１５話。
金髪の少女の正体があの子だったなんて、あ、あの子だったなんて！！皆様の予想は当たりましたか？（笑）
えー、厳密には次話で二人の決着がつくんですが、この話にまとめなかったのは、この話の雰囲気を壊したくなかったから（最後の部分も微妙にアレですが）…つまり、ほのぼのな決着になるかな、という事です（笑）
次回！金髪のあの子の行方は！？
では、第１６話でお会いしましょう。

―ｎｏｉｓｙ―（前書き）

えー、今回から後書きももう少し楽しくしてみます。
名付けて『幻想郷ステーション』。
まあ、詳しくはこのお話を読んだ後、後書きをご覧下さい（笑）
では、第１６話、どうぞお楽しみ下さい。

第１６話
幻想郷に響け、闇の福音

（…私は…また負けたのか）
地面に伏せたまま、ぎり、と歯を食い縛るヴァルキリー。
（すみません、父上…！私はまだ、奴には勝てません…）
ふと、自分の手に握られた魔剣グラムに目をやります。
（シグルズ…すまぬ、私はまだ…この剣の力を発揮できていないようだ…）
ヴァルキリーは、今は亡き神代の戦友、龍殺しのシグルズに深く謝罪をしました。

「おーい、いつまで寝てんだいヴァルにゃーん」
いつの間にかヴァルキリーの目の前に来ていたフラガ。
「…もう決着はついたのか？」
すく、と立ち上げるヴァルキリー。その顔には先ほどまでの怒りや悔しさは見えません。
「いやぁ…まあ、決着はついたんだが…その…」
「…？負けたわけではないのだろう？」
「勝ったよ？勝ったけどさ…」
困ったように目を泳がせるフラガ。
「そういえばリニアはどうした？姿が見えんが」
「あ…さ、先に戻ったんだ。準備をしに、な…」
あはは、と乾いた笑顔のフラガ。確かにリニアの姿は見えません。
そこへ…
「おいフラガ、部屋の準備は出来てるのか？」
エヴァンジェリンがとことこと歩いてきました。

「…部屋？何の話だ？」
「いやぁ、実はねヴァルにゃん…」
「私がここに降りたときに時空跳躍機が動かなくなってな、帰るに帰れんのだ」
「じゅくちょうやんきー？…なんだそれは…私を愚弄するか、貴様！」
聞き間違いの上、暴走するヴァルキリー。
「…お前こそ、耳がボケてるんじゃないのか？大丈夫か？時空跳躍機だ、じくう、ちょうやくき」
本気で心配するエヴァンジェリン。
「あはは、ヴァルにゃんは難しいことは分かりません」
ＨＡＨＡＨＡ、とわざとらしい高笑いをするフラガ。
「ふ、フラガまで私を…ぅぐ」
涙をこらえるヴァルキリー。可愛いです。
「ああ、泣くな泣くな。悪かったってヴァルにゃん」
よしよし、とヴァルキリーの頭を撫でるフラガ。
「ふぐ…うぅ」
涙が引っ込み、顔を赤くするヴァルキリー。
「なんだその緩んだ顔は、貴様らしくもない」
とは、エヴァンジェリン。また挑発するような事を言いますね。
「うるさい黙れこのロリババアが！！」
「…ほう？」
もう色々と混乱してる頭でとんでもないことを叫ぶヴァルキリー。
その言葉を聞いて再び戦闘体勢のエヴァンジェリン。
「はいはい、ケンカはもうやめましょうねーヴァルキリー」
「な、ちょ、ネサラディア！」
後ろからヴァルキリーを拘束するネサラディア。左手が下半身をまさぐっています。
「エヴァも、ケンカはやめような？うちに住ませないぞ」
「も、持ち上げるなフラガ！おい！」

フラガは、エヴァンジェリンの服の襟を掴んでひょい、と持ち上げます。ぷらぷら。
「…住ませないぞ☆」
エヴァンジェリンをつまみ上げたまま向き直らせ、ニコッとダークスマイルを浮かべるフラガ。
「わ、分かった…」
ジタバタと暴れていたエヴァンジェリンは、あっさりと大人しくなりました。

「……」
黙って銀龍邸の客間を整え、フラガ達の帰りを待つリニア。その表情（無表情）には、心なしか困惑が見受けられます（無表情ですが）。
「…時空跳躍機の修理は幻想郷にある資源では不可能…」
つまり、エヴァンジェリンはこれからずっと幻想郷に住むことになる、とリニアは理解していました。
「おや、お久しぶりですねリニア」
ぶつぶつと何か呪文のように呟くリニアの前に、黒狼が現れました。
「久しぶりです、わんちゃん」
「あはは、その近所の野良犬みたいな呼び方やめませんか？」
困ったように笑う黒狼。どうやら黒狼はちょっとリニアが苦手なようですね。

「というわけでえーき、今日からこのおチビがうちに住みます」
フラガが話しているのは四季映姫・ヤマザナドゥ。閻魔様です。
「まあ…別に構わないのですが…別の世界から来た、と言うのは…」
「フラガと同じだ」
とエヴァンジェリン。

「…なるほど…と言うことは、貴女があのダーク・エヴァンジェル？」
闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）とは、神代でのエヴァンジェリンの呼称の一つです。
「まあな、何故知っているんだ？」
「ヴァルキリーさんから何回も…」
「なるほど、あのお馬鹿か」
ふ、と鼻を鳴らして踵を返すエヴァンジェリン。フラガが後に続きます。
「じゃーなーえーき、また来るよ」

「ただいまー」
「おかえりー。早かったわね」
ネサラディアが出迎えます。
「まあな。意外とすんなりＯＫもらえた」
「私は普段の行いが良いからな、ハハハハハ！」
「あはは、どの口が言うか。この口か」
むぎゅ、とエヴァンジェリンのほっぺたをつねるフラガ。
「い、いひゃい！なな、何をする！」
「はははははは」
そこへ、いつの間にかいなくなっていたリニアがやってきました。
「マスター、お茶が入りました。霊夢様も来ています」
「霊夢が？…分かった、とりあえずお茶にしよう」

居間には、ヴァルキリーと霊夢がいました。
「邪魔してるわよ、フラガ」
と、霊夢が普段より幾分緩みの無い声で言います。
「珍しい、お前がうちに来るなんて」
「まあね。聞きたいことがあるのよ」
ちらり、とエヴァンジェリンを見て言います。

「…分かった。ヴァルにゃん、ちょっと霊夢と話してくるから…ケンカするなよ？おやつ抜くぞ」
と言って、霊夢と一緒に縁側に向かうフラガ。
「けっ、ケンカなどせん！子供扱いするな！」
うがーっ、と吠えるヴァルキリー。
「やれやれ、いつまで経っても変わらんな貴様は」
更に挑発するエヴァンジェリン。
「なっ、き…きさ「はいはいケンカはダメよー」
ぺたぺたとヴァルキリーのまな板を触るネサラディア。
どうやら、幻想郷はこれからもっと騒がしくなりそうです。

―ｎｏｉｓｙ―（後書き）

幻想郷ステーション
第一回

フ「いえーい。ついに始まりました『幻想郷ステーション』。キャストは幻想郷のみなさんでーす」
霊「初回からやる気０でお送りいたしまーす」
フ「やる気０？今やる気０って言った？ねぇ言ったよね？」
霊「事実じゃないの？」
フ「まあな！」
ネ「とんでもないコーナーね」
霊「まあ冗談はそれくらいにしといて」
フ「このコーナーは、読者のみんなから寄せられた質問、応援メッセージなどを、面白おかしく紹介するコーナーでーす」
ヴ「肝心の質問とやらはまだ無いがな」
フ「あ、泣き虫ヴァルにゃんだー」
ヴ「な、泣き虫ではない！」
エ「ふっ」
ヴ「きき貴様、今、鼻で笑ったな！は、鼻で！」
ネ（ヴァルキリー可愛いヴァルキリー可愛い）
フ「まあまあ、とりあえず！読者のみんな！幻想郷で僕と握手！」
リ（違いますマスター、お便りの募集です）
フ「ああそうだった…読者のみんな！お便り待ってるよ！」
エ「ん？泣くのか？泣くのか貴様？え？」
ヴ「う、うぐ…ふぇ…」
ネ（ヴァルキリー可愛いヴァルキリー可愛いヴｒｙ）
作「うわぁ、初回からカオスになりましたねぇ」
全「！？」

ヴ「き、貴様どこからわいた！ぐすっ」
作「ほらほら、鼻水拭いて下さい」
ネ「…？」
フ「お前誰？」
作「そうですねぇ…内緒☆で」
全（うぎっ）
作「読者の皆様、質問や応援、待っております」
ヴ「だから貴様は誰なんだ！？」作「うるさいですよ、泣き虫ヴァルキリーさん（ニコッ）」
ヴ「ふぇぇー、フラガ、あの変なのが、変なのがいじめるー」
ネ（ハアハアハアハアハｒｙ）
作「では、次回『吸血鬼大集合』をお楽しみに♪ポロリもあるよ☆」
全「ねーよ」

―strong, terrible, crazy―（前書き）

一日空けてしまいました。すみません。
１話と２話を少し直しました。
では、第１７話をお楽しみ下さい！

―strong, terrible, crazy―

第17話
最強、最恐、最狂

銀龍邸の縁側で、霊夢とフラガが並んで座って話しています。二人の顔はなにやら深刻です。
「お前は確かに、幻想郷に転移してきたのはエヴァじゃなく『アイツ』だと思ったんだな？」
と言うフラガには、いつものお馬鹿な雰囲気は全くありません。
「ええ…間違いなくね。少なくとも私が感じた違和感の正体はエヴァンジェリンではなかったわ…感覚が違うもの。今は違和感無いけど…」
霊夢も普段のぐうたらな巫女とは一変して、険しい雰囲気を漂わせています。
「俺は感じなかったんだが…うちではリニアが察知したな。さっき俺を呼びに来たときにな」
「は？…アンタは分かんなかったの？」
訝しげに眉をひそめる霊夢。
「多分擬態でもしてたんだろうな…でも、生体センサーを積んであるリニアや…お互い見たことの無いお前らには分かったんだろう」
その言葉に霊夢は、うーん、と唸りながら考え込んでしまいます。
「……考え難いわね」
と、唐突に呟く霊夢。
「だろうな。アイツ程の奴が…自分の気配を隠しきれないわけがない」
ふぅ、と短く息を吐くフラガ。「でも、ある程度の力が有る奴らには分かる程度の気配を出していたわ…異質な、ね。だから分からないのよ…何故アンタには分からなかったのか」

「俺達には認識阻害でも使ったんだろ。でも、だとしたら…お前らにはわざと察知させた？でも何のために…」
フラガがそう言うと、二人は黙ってしまいました。

「あらら…アイツ生きてんのかぁ…なぁなぁ聖十字ー」
赤みがかった長い髪を、黄色いリボンでポニーテールにしている少女は、フランバージュ。
「なに？」
藍色の髪から尖った耳を覗かせる小さな少女は聖十字。
二人は、戦闘時以外は人に化けて暮らしています。
「アイツ、生きてるみたいだぜ。そんでさぁ、最近思うんだけど…なんて言うか…」
「…そう…彼が…で、何？」
生きている、と言う事にはさして興味を示さず、珍しく歯切れの悪いフランバージュに、聖十字はちょっと真面目に耳を傾けます。
「うん、アタシ達にとっての本業に関わる事なんだけど」
「……」
自分達の本業、と言えば一つだけ。それは『戦闘』、または『殺し』。聖十字は、真面目な話だな、と思ったのでしっかりと聞く体勢に入ります。「…足りないと思わねぇか？強い奴も、面白い戦いも」
「……はぁ」
好戦的で野蛮なフランバージュの言葉に、思わず聖十字の口から溜め息が漏れます。
「フランバージュ、ふざけないで。野蛮。フラガに嫌われる」
心底呆れた顔をして簡潔に注意をする聖十字。
「いやさ、マジな話よぉ、お前はどうなのよ」
「……まだ分からない？」
無表情な聖十字から放たれるどす黒い闘気。う、とフランバージュは後退ります。

「いやいやいや、聞いてくれって。お前だって最近力のやり場に困ってんじゃないのか？アタシなんかよりよっぽど殺人的な能力を…」
持ってるんだから、と言おうとしたフランバージュは硬直しました。
何故なら目の前には、とても小さな少女とは思えない迫力で威圧してくる聖十字がいるからです。
「……フランバージュ、それ以上言わないで」
少し小さな、しかしはっきりとした声で聖十字はフランバージュを牽制します。
しばしの沈黙の後、
「……確かに、なまってる」
と、わずかに聞き取れる程度の声で聖十字が呟きました。
「…！？」
フランバージュは、聖十字が少しでも好戦的な事を言ったことに驚愕しました。
「…でも…彼なら、きっと…存分に殺し合える」
ほんなわずかに、微笑む聖十字。その表情は、まさしく殺しを楽しむ者のそれでした。
「お前…」
何か言おうとするフランバージュの口に、聖十字の人差し指がそっと当たります。
「その先は言わないで……出来れば、フラガにも言わないで」
いやぁ、もう手遅れなんじゃないかな、何年一緒に戦ってると思ってるんだ、とは怖くて言えないフランバージュでした。

紅魔館のレミリアの部屋では、レミリアとパチュリーがワインを飲みながら談笑していました。
「…！お嬢様…」
先ほどから紅魔館の近くに感じていた、異質な気配が動くのを察知して、二人の側に立っている咲夜がどこからかナイフを出してきま

す。それは、前にフラガにもらった最高のナイフでした。そんな咲夜にレミリアが、自分の唇に人差し指を当てて、
「シィー……あまり騒がない方がいい。そうでないと、アレが起きてしまうからね」
と、子供をたしなめるように言いました。
「あっ…失礼しました。しかし、これは…」
またどこかにナイフをしまい、落ち着きを取り戻す咲夜。
「あの妙な気配の原因だろうねぇ」
「なんにせよ、フラガが片付けてくれるんじゃないかしら」
パチュリーに言われて、それもそうかー、と思ってしまった咲夜でした。

紅魔館から１ｋｍも離れていない雑木林に、怪しい、しかし美しい影がありました。
「あぁぁ…士官長様…やっと貴方に会えますのね…貴方がいなくなって早１０年…ジャルトはもう１２４歳でございます…おちびさんの時空跳躍機にこっそり一緒に乗ってきた甲斐がありましたわ…」
紫色の瞳を輝かせ、うふふふ、とに上品な笑い方をする、自分をジャルトと言った黒髪の不審者。
「ああ、でも貴方はまたたくさんの綺麗な女性に言い寄られているに違いありませんわ！」
なにやら思い込みの激しい不審者です。
「…まあ良いですわ…私と士官長様の愛を邪魔する愚か者は…皆ぶっ殺して差し上げますわ…うふ、うふふふふふふ」
士官長様とは誰なのか！？士官長様と貴女の間にそもそも愛はあるのか！？どうなる幻想郷！！

―strong, terrible, crazy―（後書き）

幻想郷ステーション
第二回

フ「なんか一日暇だった気がする」
ネ「それは気のせいよ。作中ではまだ一日も経ってないわ」
フ「そっかー…」
（間）
フ「はい！いかがでしたか第17話！なんか俺の武器達が珍しくシリアスに…はわわわわわ」
霊「アンタの真面目な顔も珍しかったけどね」
ネ（それは霊夢も一緒な気が…）
フ「まあとにかく。なんと異時空から来た面倒な連中はエヴァだけじゃありませんでした！俺は気付かなかったがまあ仕方ない！」
霊「開き直るな馬鹿龍」
フ「うわーん、霊夢がぶったよママー」
ネ「まあ、何てことをするのかしらー。こうなったらお仕置きが必要ねー（棒読み）」
霊「え？」
フ「後ろからホールド」
霊「ちょっと！離しなさい馬鹿龍！この！あ、ちょ、ネサラディア、そこは…あっ」
作「はいはいネサラディアさん、放送出来なくなりますからねー」
フ「また出た！！」
ネ「ハアハアハアハア……あれ？私いつの間に元に…」
霊（助かった…）
作「やれやれ…さて！読者の方からの質問はありませんでした！お願いです。何らかの手段でメッセージを下さい。えふちーは寂しい

と死んじゃうんだぞ☆」
全（うわぁキモ…）
作「では次回『幻想郷大運動会』をお楽しみに！」
フ「あれ？てか第一回の時…次回は『吸血鬼大集合』って言ってなかったか？」
ネ「確かに」
霊「そうだっけ？」
作「……お楽しみに☆」
全「誤魔化した！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6745i/

銀の龍と愉快な仲間たち

2010年10月20日14時41分発行